資料

（平成二十一年十二月）

第五十四回「合宿教室」（厚木）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人　国民文化研究会

第五十四回〝合宿教室（厚木）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成二十一年八月二十日（木）から二十三日（日）まで三泊四日間

ところ　神奈川県厚木市「七沢自然ふれあいセンター」

参加総数　一六〇名

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長　上村和男…2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……5
〝合宿教室〟54年の歩み……6
〝合宿教室〟の日程表（三泊四日）……8
第54回〝合宿教室〟のあらまし……9
走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…27
合宿中に創作された「短歌詠草」……参加者全員…75
あとがき……91
カメラ・レポート22枚（29ページから71ページの左頁に掲載）

〝はしがき〟に代へて

㈳国民文化研究会理事長（東海ゴム工業㈱・顧問）
上村和男

昭和三十一年（一九五六年）第一回「合宿教室」が鹿児島県の霧島で開催され、今年で第五十四回になります。「合宿教室」が九州地区以外で開催される端緒となったのが「厚木市立・七沢自然教室」（当時）です。国民文化研究会創立以来の会員であられた故足立原厚木市長の肝入りで、第三十六回（平成三年）から隔年に亘り開催して来ましたが、第四十二回（平成九年）を最後に同地での開催が困難となりました。しかし、今回は第一回「七沢自然教室」開催時の所長でありました難波浩（本会会員）さんのご尽力で十二年振りで開催することが出来ました。誌面を借りて御礼申しあげると共に、今回の開催は往時を知る人にとっては感慨一入であり、故小田村理事長も足立原市長も泉下でお喜びのことと想ふと感激にたへません。

さて、「政権交代」を賭け民主党有利の総選挙戦中に開催された「合宿教室」でありましたが、全国津々浦々から馳せ参じてくださった学生を中心とした総数一六〇名は旅装を解く間もなく開会式（八月二十日二時）に列席し、三泊四日の「合宿教室」が開催されました。開会宣言、国歌斉唱二回、ついで祖国のために尊い生命を捧げられた先人の御霊に一分間の黙祷を捧げました。

参加学生を代表して九州工業大学四年谷口耕平君が「毎年この合宿教室に参加して、その度にこれから頑張るぞといふエネルギーを得てきた。同じ世代の皆さんと真剣に考へ素晴らしい合宿にしてゆきませう」と呼び掛けました。かうして全参加者は丹沢と大山の山麓のもと、ひぐらしの鳴きしきる声を聞きながらこれから始まる「合宿教室」への期待が高まっていきました。

今回講師としてお招き申し上げた埼玉大学教授で本会の顧問でもある長谷川三千子先生は「民主主義と国体」と題して、日本

古来の政治道徳と「民主主義」との関連について「五箇条の御誓文」と昭和二十一年一月一日の所謂「人間宣言」を取上げて話されました。

ヨーロッパやアメリカでは「上下心を一つにして」といふやうな日本の政治道徳は有り得ません。イギリスは外からきた国王によっての政治権力であったり、フランスはフランス革命で君主の権力を国民が奪っての政治権力となりました。政治主権の確立の裏には必ず権力といふ力が存在してゐました。「五箇条の御誓文」の「広く会議を興し万機公論に決すべし」に見られるやうに日本に於ける「民主主義」は外来のものではなく、云はば日本の国体の中心となる思想でありました。戦後のアメリカ流の「民主主義」が恰も絶対的価値を持つかの如き考へ方に憂慮をしめされました。

続いて桐蔭横浜大学・大学院教授のペマ・ギャルポ先生は「アジアにおける日本の役割」と題してご講義されました。先生は学生時代この「合宿教室」に参加された経験があり、故小田村寅二郎先生や故夜久正雄先生を敬愛されてゐました。現在は日本に帰化されてゐますが故国チベットの自治が中国に奪はれたといふ民族の悲劇を体験されてをられます。従って先生のアジアを見る目には鋭いものがあります。しかし日本をこよなく愛されてをられるので、「日本はアジアの憧れであり、お手本である。日本人として誇りと自信をもって生きなさい」との暖かい言葉をいただきました。

戦後の日教組による誤った民主主義教育を受けてきた大学生や青年諸君にとって「友情、友との付き合ひ」の問題は、大切な関心事であります。「上っ面だけの遊び友達だけではなく、真に心を許し合ふことの出来る友達を持ちたい」といふ願望に対して、この「合宿教室」では班別ごとの胸襟を開いての「班別討論」や、先人の残した文章を心を込めて読み合ふ「古典輪読」、楽しい戸外での「リクレーション」、班員が詠んだ和歌についての「相互批評」などの時間を通して各人のさうした願ひを具体的な形で得られるやう運営してまいりました。参加者の皆様に満足できる心の収穫を得ていただけたとしたら主催者としてこれに優る喜びはありません。

なほ、ここに編したこの「感想文集」は全参加者が〝閉会解散の間際〟に走り書きして下さったものです。誌面の都合上全文をそのまま載せ得なかったことは何卒ご容赦いただきたいと存じます。また、この文集の編集には十余名の方々（編集後記に記載）が公務・社務の余暇をさいて取組んで下さいました。心から感謝申し上げます。

最後になりましたがこの合宿事業を毎年行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難いご支援の数々に対しまして、会員一同に代はり、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成二十二年）の「第五十五回合宿教室」は八月二十日（金）～二十三日（月）の三泊四日間、熊本県「国立・阿蘇青年の家」で開催されます。詳細の案内パンフレットは来年三月中旬ごろ配布予定です。

何卒、皆様ご参加くださるやうお願ひいたします。

第54回全国学生青年合宿教室（平成21年８／20～８／23）於「七沢自然ふれあいセンター」

参加者

（学生班）（洋数字は参加学生数）

東北大学1　埼玉大学1　東京大学3　東京芸術大学1
学習院大学1　国学院大学3　成蹊大学1　日本大学2
亜細亜大学1　日本歯科大学1　早稲田大学2
桐蔭横浜大学1　正眼短期大学1　大阪工業大学1
九州工業大学2　福岡教育大学2　九州女子大学2
福岡大学13　筑紫女学園大学1　西南学院大学2
中村学園大学2　総合学園ヒューマンアカデミー福岡校1
熊本大学2　高校生1

計　四十八名（うち女子十七名）

（社会人参加者）　二十八名（うち女子七名）

（招聘講師）　二名

（国民文化研究会）　七十名

（事務局・アルバイト）　五名

（見学者・慰霊祭協力）　七名

総計　一六〇名

―“合宿教室” 54年の歩み―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿　蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧　島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈　良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊　勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚　木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
累計・参加人員			14,008名	

㈳国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

第54回（平成21年）全国学生青年“合宿教室”日程表（七沢）

8月20日（木）	8月21日（金）	8月22日（土）	8月23日（日）
（注意） ↓ 参加者は、一班七名前後の班に所属します。 会場入口付近で、所属する班を確認のこと。 受付：12時半開始 開会式：14時開始 (14:00) **開会式** （挨拶）国民文化研究会 理事長 **上村和男 氏** **オリエンテーション** **（合宿趣旨説明及び諸注意伝達）** 合宿教室運営委員長　**池松伸典 氏** 合宿教室指揮班長　**澤部和道 氏** (14:45) 小休憩（15分） (15:00) **合宿導入講義** **「一人一人が国を支へる柱とならう」** 国民文化研究会 副理事長 **今林 賢郁 先生** (16:30) 班別研修 (17:30) 夕 食 入 浴 休 憩 (19:30) **古典導入講義** **「源氏物語　もののあはれを知る」** 昭和音楽大学 名誉教授 **国武忠彦 先生** (21:00) 班別研修 (22:30) 就 寝 (23:00 消 灯	起床・洗面 (06:30) 朝の集ひ (07:00) 朝 食 (08:00) **講 義** **「民主主義と国体」** 埼玉大学教養学部教授 **長谷川三千子 先生** (09:30) 質疑応答 (10:00) 班別研修 （写真撮影） (12:00) 昼 食 (13:00) **短歌導入講義** 東洋紡績㈱ **庭本 秀一郎 先生** (14:00) **野外研修・短歌創作** **「大山」散策** （短歌提出） (17:30) 夕 食 入 浴 休 憩 (19:30) **国際情勢講義** **「チベット問題」から日本が学ぶべきこと** **－アジアにおける日本の役割－** 桐蔭横浜大学大学院教授 **ペマ・ギャルポ 先生** (21:00) 班別研修 (22:30 就 寝 (23:00 消 灯	起床・洗面 (06:30) 朝の集ひ (07:00) 朝 食 (08:00) **講 義** **「体験と思想」** **－千秋の人 吉田松陰に学ぶ－** 福岡県立太宰府高等学校 教諭 **占部賢志 先生** (09:30) 班別研修 (12:00) 昼 食 (13:00) **創作短歌全体批評** 熊本市環境保全局環境事業部 東部環境工場長 **折田豊生 先生** (14:30) **班別短歌相互批評** （短歌再提出） (17:00) 夕 食 入 浴 休 憩 (19:00) **会員発表** ㈱寺子屋モデル　**横畑雄基 氏** 伊佐ホームズ㈱　**小柳雄平 氏** (20:00) **慰霊祭の説明** 元新潟工科大学教授　**大岡 弘 先生** (20:30) **慰霊祭** (21:30) 班別懇談 (22:30) 就 寝 (23:00 消 灯	起床・洗面 (06:30) 朝の集ひ (07:00) 朝 食 (08:00) **講 話** **「学問と友情」** 元 富山県立富山工業高等学校 教諭 **岸本 弘 先生** (09:00) (09:15) 合宿運営委員長挨拶 全体感想自由発表 (10:30) 地区別懇談 (11:00) 感想文執筆 第2回短歌創作 班別懇談 (12:00) 清掃 (12:30) **閉会式** （挨拶）(社)国民文化研究会 副理事長 **澤部壽孫 氏** (13:00) 閉会式：13時終了 （閉会式終了後、昼食・解散）

第五十四回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目

（八月二十日・木曜日）

第五十四回全国学生青年合宿教室は、神奈川県厚木市の「七沢自然ふれあいセンター」にて開催された。当施設は、本会創立以来の会員で当時厚木市長であられた足立原茂徳氏が、「人と人との触れ合ひ、心の交流ができる施設」として建設されたもので、竣工間もない平成三年八月第三十六回合宿教室を皮切りに、以後隔年で当地での合宿開催に多大なるご支援を賜ったゆかりの地である。本感想文集所収の「合宿教室五十四年の歩み」の「開催地」厚木とはここを指す。ここでの開催の最後となった平成九年から実に十二年振りの当地での合宿開催となり、往時を知るものには感慨一入であった。

全国から集ひ来た参加者はそれぞれの思ひを胸に、受付を済ませ速やかに開会式へ臨み、三泊四日の合宿教室は幕を開けた。

開会式

國學院大学文学部二年相澤守君の力強い開会宣言の後、主催者を代表して上村和男理事長は「若い時に自分はどう生きるのかといふ志を立てることが大切である。先生方の御講義を正確に聴き、班別研修では自分の思ひを率直に述べ合って、日本はどうあるべきかを共に考へて頂きたい」と挨拶した。続いて参加学生を代表して九州工業大学四年谷口耕平君は「毎年合宿に参加し

て、そのたびにこれから一年頑張るぞといふエネルギーを得てゐる。それは同世代の人達と真剣に考へ、慰霊祭で日本を良くしていかうと誓ひを新たにするからだと思ふ。皆で素晴らしい合宿にしていきませう」と呼び掛けた。

合宿導入講義　「一人一人が国を支へる柱とならう」

本会副理事長　今林賢郁先生

初めに、二千年の歴史の最先端に生きる日本人として祖先に対しても子孫に対しても恥かしくない生き方をしよう、その学びの場として提供されたのがこの合宿教室ですと提起され、福沢諭吉の「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」の語を引かれて、一身の独立自立があればこそ「国の独立如何に係る所の事」に「心身共に鋭敏ならむこと」になると説かれた。そして大東亜戦争の歴史を知ることがわが国の真の自立回復に不可欠であると指摘され、寶邉正久先生（本会副会長）の「亡き友を思ふ」や国文研叢書『続いのちささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―』所載の遺文遺歌に拠りながら、特攻出撃で戦死された松吉正資さんと心の友・高瀬伸一さんとの友情の世界を仰がれた。

「松吉さんの思ひは、ふるさとへのなつかしみ、友の恩、大君に対する気持ちが連続してゐるものであった。心の友と濃やかな友情を分つことのできた人を犠牲者などと言へるでせうか。心からお国のことを考へ、家族のことを思ひ、自分にできることは何かに思ひを定めて殉じたのです。かうして遺文遺歌を読めば、今の皆さんの心にも伝はるものがある筈です。それは所謂『八月十五日』で歴史が切れずに連続してゐる証です。歴史の真実を身に沁みて知ることは自分自身を取戻す第一歩であり、国を支へることに繋がるのです」と説かれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて話し合ひがすす

められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。お互ひ初対面のせゐか、初めのうちは緊張して意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時に反論し時に共感し合ひながら、班員相互の交流が深められていった。

講　義　「源氏物語　もののあはれを知る」

昭和音楽大学名誉教授　國　武　忠　彦　先生

冒頭、藤原正彦先生、岡潔先生お二人の数学者の「国語は全ての教科の基礎である」「数学の基礎は情緒である」との言葉に触れられ、豊かな感情を養ふ「もののあはれ」について一緒に考へていきたいと述べられた。ついで〝人の心・人情〟と題して本居宣長の言葉を引かれ、「古事記、万葉集の世界における本当の人の心とは善か悪かで割り切れるものではなく、分析的、知的に考察されるものではない」、「心の中に目を移し入れるやうに、外から眺めるだけでなく、内から見るやうに努めることで感じられ見えるものがある」、さらに「今学問において大事なことは、自分を捨てて共感すること、相手に飛び込むといふことなんです。源氏物語のもののあはれを知ることの意味はそこにある」と述べられた。

「儒教、仏教全盛の江戸時代に、人間の根本は未練で愚かな実（まこと）の情（こころ）であると宣長が宣言したことはすごいことだった」と説かれ、その日本文学史上の功績は明治以降の西洋化と戦後のアメリカ一辺倒の時代にあってますます意義が深まってゐると指摘された。そして『源氏物語』〝柏木〟の巻を取り上げ、奥深く細やかな日本人の心の世界をお示しになり、「日本人が国語、古典を大事にしてきたことを、もののあはれとは何かといふことと共に考へて行って貰ひたい」と述べられた。

第二日目　（八月二十一日・金曜日）

早朝六時半、合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。清やかな山気に満ちた広場に参加者一同が整列すると、国旗掲揚、国歌斉唱、ラヂオ体操が行はれ、一日の研修を新たに迎へた。

朝の集ひの後、山口県立熊毛南高校教諭寳邉矢太郎氏により、文部省唱歌について懇篤なる御紹介があり、その後紹介された唱歌を全員で合唱した。特に二日目、三日目は、場所を童謡の丘に移すことで音響設備の伴奏入りでの合唱となった。紹介された唱歌名は左記の通りである。

八月二十一日　とんがり帽子
八月二十二日　里の秋
八月二十三日　われは海の子

講　義　「民主主義と国体」

埼玉大学教授　長　谷　川　三　千　子　先生

最初に、その価値を問ふまでもないほど「自明」となってゐる「民主主義」について、「人民の、人民による、人民のための政治」によって代表される「一見真っ当で穏やかな顔」の皮を一枚剥ぐと、本当は怖い「民主主義」の原理が控へてゐることを知っておくことが大切ですと問題を提起された。フランス革命の思想的背景と実際の推移を検証され、デモクラシーの語源である「民衆の力」が持つ危険な側面に触れられた。ジャン・ボダンが称へた「法律の拘束をうけない権力」としての「主権」が、ひとたび君主から国民に奪はれると「国民の意思こそ法そのものである」といふシェイエスの言葉が「国民主権」に歯止めなき「不和と敵対のイデオロギー」を吹き込むこととなり、革命は六十万のフランス人同士が殺し合ふ大惨事を齎すことになったと回想された。イギリスの場合は「古来の法」〈慣習法〉が王権の行き過ぎにバランスを与へ、革命による

迷走はやがて本来の「レヴォリューション」（ころがって再び立ち帰る）として安定へと向かはせたと指摘された。わが国では明治維新に発せられた「万機公論」「上下心ヲ一ニシテ」などを明示した「五箇条の御誓文」に見られるやうに、民主主義は外来のものではなく「この民主主義の精神的伝統は神話にも見え、上に立つ天皇が国民を『おほみたから』（大きな寶）と呼んだところに、日本の国体の中心思想があった。ところが戦後、西洋流の民主主義があたかも絶対の価値を持つかの如くわが国を覆ってゐる」と憂慮を示された。

最後に古代アテナイの重大犯罪「売国罪」について紹介され「アテナイの民主政がその刃を内側に向けても、他方で売国は明白な罪であるといふ制御が効いてゐた。その民主政は常にアテナイに対する忠誠と表裏一体であった」と述べられたが、参加者一同は「国の安全保障」が何ら問はれることなく政権交代の声のみが一人歩きしてゐるわが国の政治に対する深い警鐘と受け止めた。

短歌創作導入講義

東洋紡績㈱　庭本秀一郎先生

初めに、昨年の合宿教室で実際に短歌を創作した参加者の感想文を紹介されながら、短歌を詠むに当っては①素直に表現すること②何をどの様に感じたのかを具体的に詠むこと③自らの心の動き（感動）を詠むこと④そして正確な表現で詠むこと、の四点が肝要であると語られた。また短歌を詠むことによって感動を追体験し自らのものにすることができ、短歌を詠み交はすことにより、身近な人はもちろん歴史上の人物とも心を通はすことができると語られた。続いて「一首一文」「文語による正仮名遣ひ」「連作」などを具体例を示しながら懇切に教示された。また小学校五年の児童が母の日のために作った短歌や、ご自身が詠まれた短歌をも紹介されながら、自らの感動を率直に具体的かつ正確に短歌に詠むことの難しさとともに、

短歌の世界の広がりについても述べられた。

野外研修・大山散策・短歌創作

このあと参加者は短歌の創作を兼ねて、バスで大山（おほやま）へと向った。古くからの信仰の山で麓には土産物屋が軒を連ねてゐる。ある班は徒歩で、ある班はケーブルカーを使って阿夫利（あぶり）神社下社を参拝した。

講　義　「アジアにおける日本の役割」

桐蔭横浜大学大学院教授　ペ　マ　・　ギ　ャ　ル　ポ　先生

最初に日本人はアジアを正しく認識しなければならないと次のやうに述べられた。「アジアの一員でありながら、アジア域内に存する様々な連合体の正式メンバーとなってゐない。もっと存在感・発言力を高め、アジアの他の国々から一致して応援されるやうでなくてはならない。Ｇ８では日本だけが難題を押し付けられ経済的な手枷・足枷を掛け続けられて、さらにＡＰＥＣは円経済圏設立を阻止する為の役割を果した。国際社会はまことに厳しい」。そして八月六日（広島）・九日（長崎）を迎へるたび発する、まるで日本が加害者であるかのやうなコメントにアジア諸国民は戸惑ひを感じてゐると指摘された。「第二次大戦前、アジアにおける真の独立国は日本だけであって　当時の日本人は対チベットを含め今以上に地球的規模で物を見てゐた」と振り返りつつ、アジア諸国の経済発展は日本の協力・援助なくしてはあり得なかったし、日本はアジア諸国の憧れとお手本であった。経済力だけでなく、日本人の公共心、仕事に対する態度、思ひやり、お蔭様といふ姿勢が、「ルックイースト」「日本に学べ」の声となったと述べられた。

そして「日本人は世界のどの民族に対しても誇れることをしてきた。祖国に対する自信と誇りを取り戻して欲しい。アジアの国々は日本に期待をしてゐるが、日本が自らの方向性を示さない中で、どうして日本にリーダーとしての役割を求める事が出来るだらうか。日本人がよく口にする『お陰さま』の精神は二十一世紀をリードできる精神文化である」と説かれた。さらに対日感情が極めて良いインドとの関係を深めることが今大事なことであり、米国以外の核保有国とも繋がりを深めることは反日核保有国を牽制することに繋がると述べられた。

第三日目　（八月二十二日・土曜日）

講　義

「体験と思想―千秋の人　吉田松陰に学ぶ―」

福岡県立太宰府高校教諭　占部賢志先生

冒頭、「吉田松陰は明治の指導者を育てた立派な教育者とよく言はれるが、さう規定した瞬間、レッテルを貼った瞬間、その人は松陰の内面を知らうとしなくなる」と述べられ、兵学者・松陰が国史の真姿（国柄の把握）へと開眼して行く過程を松陰自身の言葉で辿って行かれた。

江戸に遊学した若き日の松陰は他藩の人から「御藩（おんばん）の人は日本の事に暗し」と面罵され、「我輩国命を辱（はづかし）むる段汗背（かんぱい）に堪へず候」と兄に手紙を送った。「これは大変な屈辱だった。しかし、松陰はこの屈辱の体験から逃げずに立ち向った。国史の勉強に悪戦苦闘をして行った」と述べられ、さらに松陰の直向きな研鑽の様子を述べられた。

その二年後松陰はプチャーチンの率ゐるロシア軍艦に乗らうとし、長崎へ急行する。その途中、初めて京都を訪れ、梁川星巌から、孝明天皇が国の行く末を案じて日々早朝沐浴斎戒されてゐることを聞いて深く心を動かされ、翌朝御所を訪れて「鳳闕を

拝す」といふ詩を詠んでゐる。「これは松陰の痛切な体験がそのまま文字になったもので、『野人悲泣して行くこと能はず』と詠んだ一人の日本人松陰の切実な体験なくして日本の歴史、維新を知ることはできない」と松陰の転機を語られた。そして最後に「松陰は自らの試行錯誤の体験を、自分の目指す所に向けて行ったのです。是非皆さんもこの後の班別研修で松陰の言葉を味はふ体験をして頂きたい」と述べられた。

創作短歌全体批評

熊本市東部環境工場長　折田豊生先生

最初に、短歌は心と心を結びつけるものだが、正しくものを見るためには正しい言葉を使はないといけないし、美しく正しい言葉は正しい思想、美しい生き方に繋がると述べられ、短歌創作は言葉の習練でもあると説かれた。相互批評はその大切な一歩であって、不正確や大袈裟な表現は厳しく指摘し合はないとなかなか直らないと、大学時代の歌会での経験談から相互批評の大切さを語られて、参加者の歌の批評に入って行かれた。うまく表現出来てゐない詠者のもどかしさを適確に衝かれた添削に笑ひが起り、会場は和やかな雰囲気に包まれた。最後に『万葉集』から山上憶良の「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」といふ言葉を紹介されて、日本人は古くから言葉に特別な思ひを抱き、国全体に歌を詠む土壌があった、上は天皇から下は名も無き民に至るまで歌を詠み合ってきた。歌を詠むことは歴史に連なる喜びを実感することでもあると述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。己の心の動きを言葉にすることの難しさ、人の言はんとしてゐる事を正確に受け止めることの難しさを実感させられた。妥協を許さず、時間を超過してしまふ班も多くあつたが、その分相手の心に迫るために心を砕くといふ、貴重な体験をすることが出来た。

青年体験発表

㈱寺子屋モデル　横畑雄基氏

現下の学校教育の欠陥を少しでも補ふべく各地の幼稚園や企業、神社などで展開してきた偉人伝講座が、昨年秋に初めて海外（ドイツの日本人学校）で実施されたといふ。その実現に至るまでの苦しかったプロセスと子供達に感動が伝はった時の喜びとを語った。そして将来は家庭や学校であふれるやうな思ひで先人の生き方が語られ折々に偉人の言葉が行き交ふやうな、そんな国にして行きたいと抱負を語った。

㈱伊佐ホームズ　小柳雄平氏

志貴皇子の短歌「石ばしる垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも」を朗詠して、建築設計もこの歌のやうに美しく流れ出るものにしたいと語った。ついで仕事をする上で力となった正岡子規等の言葉を紹介し、最後に自分を支へてくれた明治天皇の御製「いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ」と倭建命の「はしけやし吾家の方よ雲居起ち来も」の二首を朗詠して、日本の歴史に生かされてゐることへの感謝の思ひを語った。

慰霊祭

祭儀に先立ち大岡弘理事から慰霊祭斎行の趣旨が述べられ手順が説明された。ついで参加者は斎庭へと移動。祭儀では祓詞に代へて三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」が山口秀範常務理事により朗詠され、奥富修一理事の御製拝誦、磯貝保博副理事長の祭詞奏上と続いた。星空の下、祭儀は厳かに修められた。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭詞」である。

御製拝誦

明治天皇御製

述懐（明治三十七年）

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたたぬも

子（明治四十年）

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

歌（明治三十八年）

かぎりなきものと聞くなる言の葉の道の高ねをいつか越ゆべき

昭和天皇御製

折にふれて（昭和二十三年）

悲しくもたたかひのためきられつる文の林をしげらしめばや

靖国神社百年祭（昭和四十四年）

國のためいのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

明治神宮鎮座六十年大祭にあたり明治天皇を偲びまつりて（昭和五十五年）

外國の人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそぢの祭に

今上天皇御製

明治神宮御鎮座八十周年にあたり賜った御製（平成十四年）

しろしめしし御代かへりみて日の本のもとゐ成りたる様をしのびぬ

歌会始お題「幸」（平成十六年）

人々の幸願ひつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ

歌会始お題「生」（平成二十一年）

生きものの織りなして生くる様見つつ皇居に住みて十五年経ぬ

皇后陛下御歌

※続きまして、本年は天皇皇后両陛下には、御成婚満五十年といふ記念すべき年であり、ここに皇后様の御歌を拝誦しようとするものであります

明治神宮御鎮座七十年にあたり（平成三年）

聖なる帝に在して越ゆるべき心の山のありと宣らしき

歌会始お題「幸」（平成十六年）

幸くませ真幸くませと人びとの声渡りゆく御幸の町に

歌会始お題「生」（平成二十一年）

生命あるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ

祭詞

我らここ　さねさし相模大山の麓（ふもと）　緑に囲まれし厚木七沢自然ふれあひセンターに　十二年（とをまりふたとせ）ぶりに集ひ来て
第五十四回全国学生青年合宿教室を営み　研鑽かさね　はや三日目の夜を迎へぬ
今し　天つ日は沈み　夜のしじまに包まれて　今宵涼けき広庭を　斎庭（ゆにはと）と定め浄（きよ）めまつり　とこしへにみ国を守り続くる遠つみ祖たちと　み国の守りにみ命を捧げしあまたはらからの　み霊を招（を）ぎまつりなぐさめまつらむと　海の幸山の幸御食（みけ）御酒（みき）さゝげみ祭り仕へまつらむとす
「内平らかに外成る」の　思ひをこめて平成の　御世始まりたるも激動の　はや二十年（ふたそとせ）過ぎにける
外（と）つ国の　あまたの国に狂信の　やからはびこり恐ろしき　爆弾テロを頻発し　罪なき人の命をば　次々奪ひ止むこともなし
み国にも　阪神淡路や新潟を　おそひし大き地震（なゐ）受けて　あまたの命失ひし　自然災害ありて後　世界規模なる金融の　危機にさらされ経済の　不況の波をかぶりたり
加へてや　北朝鮮のふるまひは　拉致家族には応へなく　核実験を強行し　み国の空を侵（おか）しつつ　弾道ミサイル発射せり
内外（うちそと）に対処すべきは多かるも　国政荷なふ国会は　選挙を前に政党の　かけひき多く大事なる　議事残ししまま解散す
自民党民主党ともマニフェスト　かかげし中に生活や　経済改革うたひしも　進むべきあるべきみ国の姿をば　語りかくることわづかなり　自虐史観にとらはれ日（ひ）の本（もと）の　歴史を恥づる人あれど　み国守りみ国愛せし先人の　残せし文やみ言葉の
　思ひたどればおのづから　み国の姿美しと　心の内に見えて来む
我もまた　み国の民の一人なり　この日の本に生まれしを　誇りと思ふ念起きて　同胞感ぞ生まれける　国民（くにたみ）の　同胞感のなかりせば　自立の道はありぬべし
集ひたる　我らがために語られし
長谷川三千子先生　ペマギャルポ先生　國武忠彦先生　今林賢郁先生　占部賢志先生の　心のこもるご講義の　み言葉忘れ

ず心に刻み　合宿の終りてのちもみ国守る　心を定め学び励まむ
さはあれど　我らは　我らの務めのいたらなさ　まことの心の足らざるを恥ぢ　今よりは　いよよ心合はせてもろともに
心を鍛へ言葉を修め　み祖たちに連らなりて　祖国日本をとことはに　栄えゆかしめむと誓ひまつらむ
かしこかれども　今しみ祖たちのみ霊の大き導きにより　み国のゆくて守らせ給へ　我らが願ひを導き給へと　参加者一同
に代はり　磯貝保博　謹(つつし)み敬(うやま)ひ恐(かしこみ)申す
平成二十一年八月二十二日

班別懇談

慰霊祭の後、各班では合宿最後の夜の懇談が行はれた。さし入れの飲料を手に、まるで旧知のやうに、楽しく賑やかな語らひは尽きなかった。

第四日目　（八月二十三日・日曜日）

講　話　「学問と友情」

元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘　先生

初めに、「天照大御神の道にして天皇(すめらみこと)の天下(あめのした)をしろしめす道…」との本居宣長『うひ山ふみ』の一節をお読みになり「自分が今まで学んできたことはここで宣長がはっきりと言ひ切ってゐた」と感嘆された。『古事記』には古き時代の明き直き日本人

の心が記されてをり、我々はいつでもそこに立ち返ることができると話された。そして、この日本の国こそ自分にとって掛け替へのないものであるとの実感がなければどんな議論も意味をなさない、心の裡に日本が息づくならば何を恐れることがあらうかと力強く述べられた。また教員時代に「母」といふ題で生徒たちが詠んだ短歌を紹介されたが、それはまるで一人の連作のやうであった。そのことを『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中の一節を引いて「個人的特異性を留め」ないほどに「没我的」であると評された。そして、勝鬘経義疏「我が子の稱は自他を別たず…」の個所に触れられ、「親の子供に接する気持ちは善であり、私たちが大切にしなければならないことを、穢れない子供はふっと見せてくれる。大切なのは子供と接するやうに、教員であれば生徒と、会社であれば同僚・部下と接することである」と話された。

合宿運営委員長挨拶

池松伸典合宿運営委員長は「この四日間を振り返ると様々な場面が蘇り、また先生方からお聞きした多くのお話が頭の中を駆け巡ってゐるが、一人の日本人として生きてゐるといふ充実感を覚えてゐる」と述べ、かつて加納祐五先生（元本会監事）が話された「この合宿で実現できた事は、お互ひに心を開いて相手の心を本当に偲び合はうと懸命の努力をした事、そしてお互ひに語り合った友の真心については少しも疑ふ事がなかったといふ事。さういふ切実な気持ちを持って生きていく中で、国のいのち、日本のいのちといふものも自ら見えてくる」とのお言葉を紹介した。そして「再び現実の生活に戻れば合宿で体験した感動も薄れがちになる。むしろそこからが大事で、合宿での体験を思ひ起してここで出会った仲間と様々な交流を深めて行って欲しい」と語った。

全体感想自由発表

次々と登壇した参加者は合宿の日々を振り返って、その感想を率直に語つた。

「日本の国の素晴らしさと、その日本を守る為に戦った人々の思ひに触れることができた」、「若い人々の学ぶ姿に安心した、世界に誇れる日本の為に皆さんに期待したい」、「松陰の言葉に直に触れて、彼の苦悩と体験が偉大な人格を作ったと実感した」「歴史を学ぶとはレッテルを貼る事ではなく、直に言葉に触れて人物と交はることだと感じた」、「慰霊祭の厳粛な雰囲気に今までになく緊張し、言ひ様のない感動を覚えた」、「孝明天皇のお心を偲ばれる吉田松陰先生のお姿に感動した」、「短歌相互批評を通じて、思ひを正確に表現する事の難しさと同時に言葉と心を一致させることの大切さを学んだ」、「様々なご講義や班別研修の中で、日本をいろいろな観点から捉へることができた」、「参加者の志と意識の高さに驚き、さういふ友を得たことを嬉しく思ふ」、「日本人本来の素晴らしい精神文化、伝統を取り戻さねばといふ思ひを強くし、今こそもっと深い勉強が必要だと感じた」…。

閉会式

主催者を代表して澤部壽孫副理事長は「皆さんが体験した『心を働かせる』といふことが互ひの信頼関係を築き、伝統文化を継承することに深く繋がってゐる。この心を働かせるといふことに意を留め、合宿で出会った友と共に勉強して行って欲しい。ここで学んだことを日常の生活の中で是非生かして行って欲しい」と挨拶した。続いて参加学生を代表して福岡大学二年の岡松侑希君が「日本人としての自覚を持つことや良き友を作ることの大切さを学んだ。各地で同じ思ひを持った仲間がゐることを思ひ出しながら勉強を続けて行きたい」と今後の抱負を語り、来年の合宿への参加を呼び掛けた。そして、埼玉大学一年の山中利郎君の閉会宣言を以て第五十四回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

助言者の紹介

㈳国民文化研究会　理事長　上村　和男
元・日商岩井　澤部　壽孫
㈱伊勢利　代表取締役社長　今林　賢郁
元・㈱講談社　磯貝　保博
拓殖大学日本文化研究所　客員教授　山内　健生
㈳国民文化研究会　事務局長　稲津利比古
㈱寺子屋モデル世話役社長・福岡事務所長　山口　秀範
元・小田原市立矢作小学校長　岩越　豊雄
東急建設㈱常務執行役員　奥富　修一
元・新潟工科大学　教授　大岡　弘
中島法律事務所　弁護士　中島　繁樹
伊佐ホームズ㈱　取締役社長　伊佐　裕
福岡県立大宰府高等学校　教諭　占部　賢志
山口県立熊毛南高等学校　教諭　寳邉矢太郎
興銀リース㈱　小柳志乃夫
日章工業㈱　代表取締役社長　藤新　成信
新明電材㈱　飯島　隆史
昭和音楽大学　名誉教授　國武　忠彦
福岡県立直方高等学校　教諭　小野　吉宣
熊本市役所　折田　豊生
ＮＰＯ法人教育オンブズマン　稲田　健二
医療法人　仁厚会病院　顧問　難波　浩
品質・環境システム審査員　山本　博資
元・キューピー㈱　山本　伸治
元㈶日本ユースホステル協会　小林　昭紀
元・富山県立富山工業高等学校　教諭　岸本　弘
ＳＩＳ㈱　内田　巌彦
日揮㈱　江口　研治
神奈川県立秦野曽屋高等学校　教諭　原川　猛雄
九州大学大学院　教授　清水昭比古
㈱シアターテレビジョン　大内　保治
㈶交通事故総合分析センター　小田村初男
産経新聞「ウェーブ産経」推進本部長　塩塚　保
損害保険料率算出機構　鎹　信弘
神奈川県立大船高等学校　教諭　中村　正和
亜細亜大学　平槇　明人
日本ユニシス㈱　大町　憲朗
鎌倉の教育を良くする会　代表　山内　裕子
若築建設㈱　九州支店　池松　伸典
日産自動車㈱　奈良崎修二
出光石油化学㈱　広島　秀明
㈱日立製作所　松井　哲也
ＩＭＳグループ本部　総合企画部　最知　浩一
㈱アルバック　北浜　道
㈱日本教文社　坂本　芳明
神奈川県立氷取沢高等学校　教諭　大日方　学

熊本県立熊本高等学校　教諭　久保田　真
ハローワーク福岡中央　古川　広治
調神社　岸野　克巳
國學院大學栃木短期大学講師　濱口　和久
日本青年協議会　松岡　篤志
新宿区立教育センター　上甲　能也
アサヒ飲料㈱　澤部　和道
東洋紡績㈱　庭本秀一郎
日本青年協議会　外村　聖典
㈱寺子屋モデル　講師　横畑　雄基
アトラスコプコ㈱　森田　暁子
㈱ハウインターナショナル　桑木　康宏
インターナショナルリスクリミテッド　伊藤　俊介
㈱ラック　高橋俊太郎
伊佐ホームズ㈱　小柳　雄平
紀伊国屋書店　野村　亮
不二サッシ㈱　高木　雅史
㈱ハウインターナショナル　多賀祐之介
㈱東宝スタジオサービス　佐野　宣志
日本青年協議会　三荻　祥

合宿運営本部　池松　伸典・小柳　志乃夫・飯島　隆史
藤新　成信・庭本　秀一郎・
指　揮　班　澤部　和道・久保田真・坂本　芳明

唱歌指導　伊藤　俊介・小柳　雄平・野村　亮
高木　雅史・多賀祐之介・佐野　宣志
寶邉矢太郎
事務局　稲津利比古・山本　伸治・漆原　弘子
不二聖心女子学院高校　岸　花帆里
神奈川県立生田高校　江崎　真穂
記録班　最知　浩一・高橋俊太郎

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。

第一班―男子学生―

自分の頭でしっかり考えたい

（福岡大学　経　二年　岡松侑希）

一番印象に残っているのは今林賢郁先生の「一人一人が国を支へる柱にならう」という導入講義での、「日本人である自分を自分の言葉で言えるようになる」という言葉です。自分が日本人であることを意識し、自分の頭でしっかり物事を考える大切さを感じました。私も日本人である自分を言えるようになり、日本人としての役割をはたせるようになりたいと思います。この合宿で先輩や後輩など歳の違った友に出会い多くのことを語り合うことができました。この友とのつながりを大切にし、これから一年間、場所は違うけれど、共に学んでいる友がいることを忘れずに勉強したいと思います。そして来年、五十五回目の合宿教室で共に学びたいと思いました。

七沢の自然の家に寝泊まりて友と語らひ偉人を学ぶ

占部賢志先生の御講義「体験と思想」を聞いて

（熊本大学　工　三年　香川峻輔）

私が合宿教室で一番心を動かされた御講義は占部賢志先生の御講義でした。自分は熊本大学輪読サークル「松熊会」で吉田松陰先生の幽室文稿を輪読しており、ただただ盲目的に畏敬の念を感じていました。しかし、占部先生の御講義を聞いて二十代の松陰先生は兵学に心をとらわれ人の心情の動きを受け取ろうとせず、そのせいで江戸遊学中に「御藩の人は日本の事に暗し」と云われ、「私輩国命を辱むる段汗背に堪へず候」と猛省なされていらっしゃいました。その時、自分は盲目的に松陰先生を尊敬し松陰先生の文章に真正面から向き合っていたのかと思えました。それを疑問に思えたことがこれからの人生にとても役に立つのではないかと思いました。

先生の御講義聞いて感動し議論を交はし理解深める

本当に楽しそうに講義されていた

（國學院大學　文　四年　坂本匡史）

國武忠彦先生は源氏物語を本当に楽しそうに、うれしそうに講義されておられた。千年前の人々の細やかな心情にも驚いたが、それをみずみずしく蘇らせる先生の心ばえに感動した。本居宣長もこのようにして先人の物語、心情をよみがえらせてきたのだろう。このような人がいなければ「日本とは何か」との問いに答えるに値するような文化は残らなかった。私たちが当然のように触れる歴史上の人物、古典が奇跡的に伝わってきているのだと感じた。

国支ふ柱は制度にあらずして先人慕ふ心磨きぞ

日本を知り、日本を支える

（福岡大学　経　四年　田中宏輝）

私は合宿の御講義で自分の生きる日本という国がどれだけ尊く素晴らしいものを持っているかということ、そしてその日本を守る為に戦った人がいるということ、その人達のおかげで自分が生きているということ、その事を必死に後世に伝えようとする人がいることを改めて知ることができました。また、班別研修においては貴重な御講義の内容を友達と理解を深める事で、よりよく内容を理解する事ができました。そして、各人リーダーとしてメンバーを引っ張る立場にあり、皆同じ悩みを持っていることを知りました。

私は日本が大好きです。日本に生まれた事を誇りに思っています。この合宿を通して、より多くの人が日本の素晴らしさに気づけるよう自分も何かしたいと思うようになりました。

日の本に遺し給ひし先人の言葉ぞ伝へむ後の世の為

改めて輪読の素晴らしさを学ぶ

（九州工業大学　院　一年　鷲頭祥平）

今回の合宿で最も感動したことは、占部賢志先生の御講義後の班別輪読での「非泣」の解釈についてです。私は初め「非泣」とは天皇陛下のことを今まで頭でしか理解できなかった吉田松陰先生の悔しさや恥ずかしさからくるものと

カメラ・レポート1

主催者を代表して上村和男理事長は「若い時に自分はどう生きるのかといふ志を立てることが大切である。ご講義を正確に聴き、班別研修では自分の思ひを率直に述べ合って、日本はどうあるべきかを共に考へて頂きたい」と挨拶した。

思っていました。しかし、班員の香川峻輔君が「これは天皇陛下の御気持ちを心から理解しようとしてその結果天皇陛下の御気持ちをお察しして非泣したのだと思います」と言われた時、松陰先生の文章に大きく近づくことができたような気がしました。また、このような合宿ができたのは運営の方々、講師の方々、そして参加者一人一人のおかげのような気がします。合宿に関わられたすべての皆様、本当にありがとうございました。

み友らが「歩いて降りよう」と言ひたれば自然と体に力がこもるは

君を知る友ら幾たり君を囲み援け来りしを嬉しくぞ思ふ
若きらが壇上に立ち感動を述ぶるを君は如何に聞くらむ
この後もかたみに力かなへつつ心通はし尽さむともに

若者の全体感想自由発表を聞きて

（熊本市役所　折田豊生　58歳）

全体感想自由発表を聞いてゐると若い友らの言葉に救はれる思ひがする。

来る衆議院選では民主党が圧勝すると予測されてゐるが、さうなれば我が国はいよいよ混迷の度を深めることになるであらうが、この集ひで学んだ若者達はまさに祖国の命運をつなぎ止める頼みの綱と思はれてならない。

合宿に限らず一人でも二人でもこの道に連なる若者を誘ひ育てて行かなければならない。

池松運営委員長を労ふ

ひととせを学びの集ひのくはだてに日々み心を砕きましけり
忙しきなりはひならむにいささかもさある素振りを見せざりき君

第二班―男子学生―

『勤皇家』吉田松陰となる姿にもっと向き合いたい

（成蹊大学　法　四年　亀澤矢汐）

占部賢志先生のご講義の中で、吉田松陰先生が実は尊皇の念をご自分の中で固めるのに非常に迷走を繰り返されていたことに驚きました。まさか現在の私より一歳若年の松陰先生が、逆賊の足利尊氏を「英雄」として認識されていたなどとは夢にも思いませんでした。しかし、二度の屈辱に対して深い羞恥の念を覚え、猛勉強された結果、我々のよく知る尊皇家吉田松陰になっていく姿を見ると、やはりスゴイ、もっと松陰と向かい合いたいと思うことが出来ました。

私も今回の合宿で学問も思慮も心の鍛錬も足りていないかを再確認することがありました。班員や参加者との会話の中で、皆さん懸命に学び、良く自分の頭で考え、如何に国を憂えているかを感じました。私も初心に立ち返りここでの学びをエネルギーとして頑張ります。

改めて自分の未熟さ実感し初心を少し思ひだしけり

人間の本質はやはり精神にある

（東京大学　法　三年　大石広行）

最も感じ入ったのは「もののあはれ」についての御講義でした。「もののあはれ」について学んで何の実践的な意味があろうかと思っていたのですが、講義を聴き自ら考えて行くうちに考えは変わりました。大学では剣道部に所属していますが、剣道を通じても人間の本質はやはり精神にあると感じています。心があって肉体がある、肉体のみをいくら鍛えようとしても駄目で、その肉体を動かす心を鍛えなければ意味がない。その意味で、世におけるできごとを「心にあぢはへて、わが心にわきまへしる」即ち、推しはかり、想像し、共感して心に深く理解する、という「もののあはれ」を感じることのできる心というものは、自らを豊かにし、以て社会の役に立つためには、非常に大切であると感じました。

七沢に来りて「もののあはれ」とふ言葉学びて心の澄みけり
日の本のもののあはれの心をば忘れで國の役にぞ立たん

「日本人として取り戻すべき心」を見つけた

（福岡大学　経　四年　岡松和希）

私が一番印象に残っている言葉は「もののあはれ」です。

カメラ・レポート2

オリエンテーション。池松伸典合宿運営委員長は、合宿を始めるにあたり「この合宿は相互研鑽の場です。「話す」ことよりむしろ人の話をよく「聴く」ことに重きを置いて下さい」と語った（写真右）。澤部和道指揮班長からは参加者が気持ちよく合宿生活を送るための諸注意が説明された（写真左）。

「人の喜びや悲しみをあじわい、おしはかり、想像し、推量し、共感する」というお話を聞き、日本人として取り戻すべき心は、そういう心なのではないかと感じました。

私自身、小学生と触れ合う機会が多々あるのですが、多くの子供はこういった心を親から引き継いでいないような気がします。

私はまだまだ未熟ですが、次の世代を引っ張っていく日本人として、未来に大きく羽ばたいていきたいと思います。

今回学んだ事を活かし、一度しかない人生をよりよいものにしていきたいと感じました。

歴史から受け継ぐべきは取り入れて未来を開く人になりたし

「おかげさま」を伝えたい

（桐蔭横浜大学　三年　木阪達彦）

親切な班員に恵まれて良かったです。特に、講義の後の討論では、普段余り発言しない私でも、ストレートに意見を述べることが出来てとても充実した三日間でした。

合宿で講義をされていた先生方は皆さん「日本」という國に自信を持っておられることを強く感じました。

ペマ・ギャルポ先生がお話しされた「おかげさま」という言葉を、今まで自分に力を支えたり、力を分けてくれた方々への感謝の意をもって使っていこうと思いました。

志同じ友らと向き合へば難解学問も身近となりけり

言葉の持続は感情の持続だと思った

（國學院大學　神道文化　二年　上野竜太朗）

今回気付いた事は、和歌はやはり日本語でしか表現できないものであって、普段なんとなく使っている日本語、言葉を大切にしなければならないと思いました。ペマ・ギャルポ先生の「今の日本では言葉が引き継がれていない。それはすなわち感情が引き継がれていないということです」と言うお話を聞いて自分が思っている以上に言葉は大切な物ではないかという気がしました。歴史上の人物の言葉とは、当時を生きたその人物の感情そのものではないかと思いました。まさに言葉の持続は感情の持続であり、その国の個性を後世まで伝えることになると思いました。

先人の残し給ひし日本を大切にして生きてゆきたし
友どちと共に学びし四日間を我の心に永遠に残さん

班員が本音でぶつかれたのか不安

（㈱寺子屋モデル　横畑雄基　33歳）

今回は学生班の班長をさせていただいたが、改めて各々の班員の言葉を引き出していくことの難しさを感じた。

皆真面目で、真剣に講義も聴き、メモもたくさんとっている。なのに班別討論では「感想」が出てこない。皆が「良い話を聞けた」で終わっているのではないか、頭でばかり考え

ているのではないかと、私自身が少々口を出しすぎたかもしれない。班長としての不甲斐なさを強く感じた。

しかし、一人一人指名してみれば、何を感じたか、どう受け取ったかを自分の言葉で語ってくれた。内にかかえる感動が素直に言葉に出来ないのはどうしてだろう？今回は、それが未解決のまま終わりそうなことが残念である。

今後も班員と交流を深め、彼等と更に腹を割って話せる、そんな関係を作っていきたい

国旗掲揚・体操係となった亀澤矢汐君

友どちに「そろそろ起きぬとまずいよ」と肩を叩きつ起せし君は

改めて学びの場のありがたさを知る

（日産自動車㈱　奈良崎修一　53歳）

本当に久しぶりの合宿で、あらためて学びの場のありがたさを思ひ知らされた経験であった。十年・二十年ぶりにお会ひできた先生方・先輩方もあり、懐かしいことであった。

御講義の中では、占部賢志先生の吉田松陰が驚きであった。苦悩しつつ、学びを極めんとする〝青年〟松陰の姿を初めて示して頂いた様に思はれ、今迄の自分の読み方が如何に皮相なものであったかを思ひ知らされた。

また寶邉矢太郎さんの唱歌の解説も大変素晴らしいものであった。「里の秋」の詩の意味とエピソードを教へていただき、皆で唱和しつつ、涙があふれて仕方なかった。

カメラ・レポート3

合宿導入講義。今林賢郁副理事長は「一人一人が国を支へる柱とならう」と題して「大東亜戦争の歴史を知ることが我国の眞の自立回復に不可欠である」と指摘され「歴史の眞實を身に沁みて知ることは自分自身を取戻す第一歩であり、国を支へることに繋がる」と説かれた。

長らく合宿からも離れてをりましたが、少しづゝ己が学びを再会せねばと思はしめらるる合宿でした。ありがたうございました。

庭本秀一郎兄の短歌導入講義

吾子のこと義父君のこと歌によみし君がこころの深さ偲ばる

「たゆまずも進むがををし」とふ御言葉に力を得しと君は語れり

童謡の丘にて寶邉矢太郎さんより唱歌「里の秋」のエピソードを聞きて

友みなと丘につどひて「里の秋」のなつかしき調べともに歌ふもいくさ終へて祖国に帰るはらからを待ちこがれつゝ歌はれにしか

南方ゆ帰る父君ご無事でと祈りを込めて歌はれにしか

第三班―男子学生―

学問の浅さ

（㈱ハウインターナショナル　桑木康宏　32歳）

「言葉を引き継いでいないということは感情が引き継がれていないということ」ペマ・ギャルポ先生のお言葉が心に残る。また、先生は、チベット出身でありながら、日本のことを自分の国のように思ってくださる理由として「愛するに値するものを日本は持っている」、「自分は、国を失い難民となり自尊心を失った経験を持つ。このつらい経験をした自分と同じ道をたどって欲しくない」とおっしゃられた。今の日本に対する危機意識を呼び覚まされると同時に、自分の学問の浅さ、そして言葉を引き継げていない状況を深く反省させられた。

今回、それぞれに個性のある素晴らしい班のメンバーに恵まれた。班長をさせて頂き、「自分の不勉強」、「相手の心に迫ろうとする姿勢の甘さ」、また何より「先生のご講義に感動する心の弱さ」を反省させられた。共に学べたはずのことが学び取りきれなかったのではないかと申し訳なく思う。せっかく頂いたご縁を大切に、これからも折に触れて連絡を取り、今回共有しきれていない学問の喜びを少しずつ共有していきたい。

素晴らしき友との出会ひをこれからも折々触れて育みゆかむ

恥辱体験を超えて

（福岡教育大学　院　二年　平田無為）

占部賢志先生のお話の中に、吉田松陰が江戸遊学において恥辱を受けたというお話がありました。「御藩の人は日本のことに暗し」という言葉を受けた松陰先生の体験から、私は一年前に占部先生ご本人に大学での講演依頼をした時のことを思い浮かべました。占部先生は、その時、「今学生は何を求めているのか。君は今何を伝えたいのか」と問われましたが、自分は二の句がつげませんでした。それは、自分が大学で戦っ

ていたことの本質、大学生に伝えたいと思う日本について何も知らないという現状を浮き彫りにされ、メッキがはがれていくというまさに、自分に「平田は、大学に、日本に、暗し」とつきつけられた恥辱を味わう体験でした。そのことを思い浮かべる中で、占部先生が「松陰は恥ずかしめから逃げなかった。ひるまなかった」と喝破された時、松陰先生の本当のすごさ、強さがわかったような気がしました。同時に、これが、歴史を学ぶということなのだと感じられて参りました。今回「尚友」という言葉について「尚（ふるき）を友とする」と学びましたが、松陰先生の功績ではなく、言葉に触れること、その中で、先生のまごころを感じる学びを行い。自分と大学の学友と真に向き合って参りたく思います。

〝暗し〟との恥辱の言葉を受けつつも逃げずひるまぬ松陰（うし）のせまりく

うわべに囚われず本質を見る

（福岡大学　法　三年　溝部陽平）

私が今回の合宿に参加した理由は、初めは薦められてということもありましたが、神奈川に旅行ができるという簡単な気持ちで来てしまいました。けどそんな気持ちも周りの人間の真剣に話される姿を見て、すぐに自分の中での心の持ちようも変わっていきました。今回の四日間は全ての事が、自分にとっての勉強であったと思っています。それと同時に、自

カメラ・レポート4

古典導入講義「源氏物語　もののあはれを知る」で昭和音楽大学名誉教授・國武忠彦先生は『源氏物語』〝柏木〟の巻を取り上げ、奥深く細やかな日本人の心の世界を示された。

分の勉強不足も感じました。だから、私は、「聴く」ことによって、講師の先生や班員の皆さんから色々な知識や考えを吸収できるよう努力しました。「聴く」事も大切な勉強だとも思いました。今回の合宿で学んだ、物事のうわべだけにとらわれず、その中身の方もじっくり見て考えることをしたいと思います。そして自分が見て、感じて考え行動するということを通して、自分が大学で勉強している寺子屋の活動にも繋げていこうと思います。

合宿で友らと過ごせし四日間すべての事が我が実になりけり

新しいつきあひのはじまり

（元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘　64歳）

二年ぶりに男子学生班の中で合宿を過ごした。自分も含めて七名の班友であるが、これからまた新しいつきあひが始まると思ふと楽しみである。一昨年の信貴山合宿の友にも、昨年の伊勢合宿の友にも会へた。顔を合はすだけでなつかしい思ひがこみ上げる。いつの間にか掛けがへのない友となってゐるからであらう。

合宿の流れはとてもよかったと思ふ。毎回、同じことを感じるが、お一人お一人の講師のお気持ちがどこかでつながり、一本の太い柱ができてきたやうに思ふ。

自分自身の講話は拙いものであったが、多くの師友の導きを得て、何とか大役を果たし得たかとほっとしてゐる。

あらたなるものなつかしきもの力合はせ今合宿は果てなむとする
遠くよりしのびたまへる師や友のみ顔いくたびも目に浮びきて
朝な夕な仰ぎし向つ峰（を）鐘ヶ岳を日盛りの中にしみじみと見つ

印象に残った二つの講義

（中村学園大学　二年　園田真也）

初参加のこの合宿で一番学んだことは協調性の大切さである。講義で印象に残ったのは、ペマ・ギャルポ先生と占部賢志先生のご講義である。ペマ先生がおっしゃったように自分自身誇れるものを発見して自分に自信を持つことが大事であると感じた。占部先生からは、歴史上の人物の名前と年表だけではなく、その人の言葉についてもっと追求し、考え方を把握することが大事であることを学んだ。

東から朝を知らせる太陽はかけがへのない元気の源
カーテンの間から溢れる太陽はほのかに光り目にしみるなり

生き方の指針を与えられた

（東京大学　法　三年　室園隆大）

今回の合宿の講義で印象に残ったのは、初日の今林賢郁先生のご講義だった。「日本はオレだ、と自分の言葉で言えるようになる」ことが、真の「独立」であるというお言葉には改めて自分自身を振り返らざるを得なかった。また福沢諭吉

の「心身ともに鋭敏ならん」の文章について、普段は各々の専門分野ないし職務に励みつつ、「国の独立に係る事」については鋭敏な危機感を持つようにすればよい、と教えられ、あるべき生き方としての指針を与えられた。

空広き厚木に集ひ友達と君が代歌へば心に沁みる
いざ故郷へ帰る道こそ違へども過ごせし日々の友情は忘れじ

日本人としての立脚点得たやうに思ふ

（埼玉大学　教養　一年　山中利郎）

この合宿で友達と真情をぶっつけ合ふことで、やうやく自分が日本にゐるといふことが実感できたやうな気がした。立脚点を得たやうに思はれた。日本人であることの喜びを日本語を通して実感することができた。この思ひを自らの言葉で伝へるために、言葉をより大切に、正確に用ゐることを心がけたい。先人達の生き様を美しい日本語を通して友達と共感できた瞬間を忘れることがないやうにしたい。

みづからのおもひをしかととらへむとことばをさがしなやみつづけり
ことだまのさきはふ国に生まれたりと思へることのうれしかりけり
すなほなる思ひをかざらず語りたる友らの言葉胸に残りぬ
夜を通し語り合ひたる友どちと今別るるは惜しくもあるかな

カメラ・レポート5

講義「民主主義と国体」で、埼玉大学教授・長谷川三千子先生は、明治維新の折に発せられた「万機公論」「上下心ヲ一ニシテ」などを明示した「五箇条の御誓文」に見られるやうに、民主主義は外来のものではないことを指摘された。

第四班―男子学生―

友との再会の場

（九州工業大学　情報工　四年　谷口耕平）

今回の合宿で一番心に残った事は、これまで参加してきた合宿で出会った方々と、再びお会いできた事でした。開会式の後、以前の合宿で同じ班であった平田無為さんや班付きの先生としてお世話になった外村聖典先生がわざわざ僕の席まで来て下さった時は、懐かしさと嬉しさで胸が熱くなりました。

また、初めて合宿に参加した三年前の合宿教室で僕の班の班長であった野村亮さんとお会いした時、その野村さんの本当に再会を喜んで下さっている表情に三年前の合宿の懐かしさと、会えた事の嬉しさが込み上げてきました。

毎年続いている合宿教室が友との再会の場となっており、それがこの合宿の素晴らしさの一つだと感じました。

七沢に出会ひし友らは力なき班長我を助けくるるも

「おかげさま」の大切さ

（中村学園大学　三年　赤峰大輝）

今回、初めての参加で不安もありましたが、班のメンバーと共に行動し、研修を受ける事を通して、一つの講義が終わる度に自分の考えや思いが、受ける前に比べて、より幅広く考えられるようになっているのが分かり、とても充実した時間を過ごすことができました。

最も印象に残っているのは、ペマ・ギャルポ先生の講義です。先生がおっしゃっていた「おかげさま」の大切さや、今、日本人が忘れかけている日本人らしさを取り戻すためには、何が必要で、そのためにはどうすれば良いのかを考えさせられました。また、今回充実した研修にすることができたのも、社会人の方や、班のメンバーを含め、学生班の方々がいたからこそ、実現されたことであり、施設のみなさまなどいろんな方のおかげ様であると感じます。

偶然に出会ひし友と七沢の研修を経て生涯の友
顔合せあっといふ間にうちとけし共に過ごせし七沢の夏

日本のことをもっと知るべきだ

（福岡大学　経　二年　深見俊樹）

特に印象に残っているのはペマ・ギャルポ先生の「アジアにおける日本の役割」です。今の日本があるのは僕達が生まれる前の方々の「おかげさま」なんだと改めて感謝するべきだと思いました。また、今までは「男は男らしく」「女は女らしく」という言葉を差別的に見ていましたが、ギャルポ先生が「〝らしく〟は〝ならでは〟の意であり、差別ではなく

伝統である。」とおっしゃった事にとても感動し、この伝統がなくなったら今まで築いてきた日本が一瞬にしてなくなると思いました。まずは、一人一人が日本に誇りを持ち日本という国をもっと知るべきであると思いました。

七沢で初めて会ひし人達と帰るころには心友になりけり

人物に迫る学問をしたい

（大阪工業大学　院　二年　川口　亮）

私は、日本人であるにも関わらず、日本の事をあまりにも知らなさすぎるという事を強く感じました。特に、占部賢志先生の「体験と思想」では、吉田松陰に対して今までとは違う認識を持ちました。吉田松陰には学校で教わった「明治維新の礎を築いた人物」という印象しかありませんでしたが、尊皇の思想に至るまでの多くの恥辱や挫折を味わい、それでもめげず再起して行ったのだと知りました。単に一言でレッテルを張って勉強した気になるだけでは、何も学ぶことは出来ないのだと気づかされました。これまでに学んだ歴史上の人物もレッテル貼りをしているだけではないのかと感じていて、その人物の書物や言葉などを丹念に辿り、その人物に近付きたいと思います。

そして何よりも嬉しかったのは、ほかの地域の大学生と知り合うことが出来たことです。班別研修などでお互いに語り合うにつれて、やがて打ち解けることができ、旧来からの親

カメラ・レポート6

講義のあとの班別研修で質問に答へる長谷川三千子先生。

友であるような感じがしました。できれば、合宿終了後も、折に触れて連絡を取って、多くの事を語り合う事が出来ればと思います。

七沢で出会ひし友と打ち解けて語りしことの忘れられずも

日本人としての誇りを感じた

（西南学院大学　四年　森山正邦）

今回、自分は初めてこの合宿に参加しました。普段全く考えた事のないような題材ばかりで、正直、良く理解できない所もありました。しかし、自分にとってはそういった問題を考える良いきっかけになったと考えています。特に、二日目のペマ・ギャルポ先生の、アジアにおける日本の在り方についての講話は、非常に興味深い内容でした。日本という国が、アジアにおいてトップとしてリーダーシップを発揮し、アジア諸国をけん引して行くべき国家であるという言葉には日本人としてとても誇らしい気持ちになりました。しかし、一方で、日本人にその自覚が欠けているというご指摘もあり、個人として、何ができるのかと、深く考えさせられる講話でした。

七沢で友と交はせし約束を博多の街で我は果たさむ

第五班―男子学生―

日本人として自信と誇りを持ちたい

（神奈川私立藤沢翔陵高校　三年　須藤慶一郎）

去年と同様今年も父からの強制でしたが、参加して良かったと思いました。講義の中で一番印象に残っているのは、ペマ・ギャルポ先生の「アジアにおける日本の役割」についての講義です。この講義を聴いて、日本はアジアを牽引するリーダーとしてアジア各国から期待されていること、日本人としての自信を取り戻すこと、「おかげさま」という精神があることなどを学びました。

僕はこれから自分も日本人の一人として自信と誇りを持てるようになりたいと思いました。

山登り疲れしあとの御褒美は御茶屋で食べしソフトクリーム

どれも新鮮で貴重な体験でした

（福岡大学　経　一年　松井　豊）

合宿での活動はどれも新鮮で大山散策にしても、慰霊祭にしても、とても貴重な体験でした。大山散策の短歌作りでは、心の動く瞬間を自身で探さなければならず、今までとは違う時間を過しました。合宿が終わっても心の動きを考えながら生活することで、自分の事をより理解できるようになると思います。慰霊祭では今までにない不思議な感情になりました。この不思議をこれから考えたいと思います。

知らざること多しと気付きしこの気持ち山を降りても忘れじと思ふ

自分の全てを注ぎこめた

（日本大学　法　一年　小柳辰介）

初めて来た合宿は非常に新鮮且つハードであり、そして短かったというのが率直な感想である。毎日先生方の御講義を聞き、班の皆でその内容を吟味し、お互いの意見をぶっつけ合う。とても頭が疲れた。二日目には大山登山で、班員の相澤守君と共に急な山路を駆け登って、とても体が疲れた。三日目は慰霊祭があり、英霊の御霊を前に僕はただただ立ち尽くすのみであった。とても精神が疲れた。自分の今持っている全てをこの合宿に注ぎこめたと思う。だからこそ疲労しきっている今も清々しい気分である。

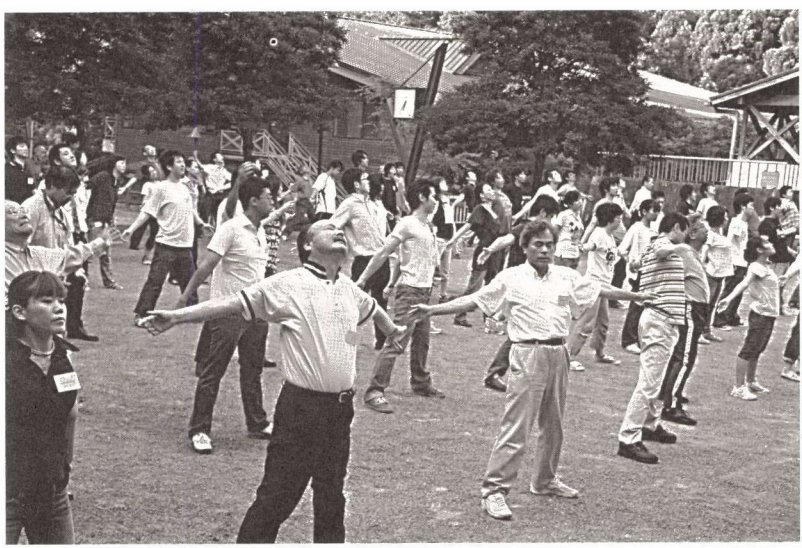
古より国を護りし英霊のみたまを前に我立ちつくす

日本の為に貢献できる存在になりたい

（國學院大學　文　二年　相澤　守）

一番印象に残ったのは、占部賢志先生の御講義でした。私は初めて吉田松陰先生が歴史上名の残る「吉田松陰」になるまでに自問自答や悪戦苦闘を繰り返し、歴史を見誤ったり、藩の名誉を汚す屈辱を受けたりしたことを知り、人は皆誰で

カメラ・レポート7



「朝の集ひ」では研修施設内の広場で元気よく体操を行ふ。

もこのようなことを体験しているのだと感じました。そして松陰先生はこの屈辱に怯むことなく、水戸学の門を叩いて、学びを続け、また梁川星巌から孝明天皇が国民の為に御祈りになっておられることを知りました。私はこの屈辱に怯まず学びを深めていったからこそ、松陰は後世に名を残す人物になったのだと思います。私も松陰のように将来日本の為に貢献できる存在になりたいと思います。

合宿教室最終日
封筒にありつるレジメ使ひ果て閉会迎へぬ心残れど

思い込みで判断してはならない

（早稲田大学　政経　三年　池上晃平）

占部賢志先生の講義の冒頭で「人物を見るときに思い込みで判断してはならない。その人の心の中を覗こうとする気持ちが大切」という言葉を聞いたときはハッとした。思い込みを払拭して、真実を見出すことが学問であると私は考えている。占部先生の歴史に向かう姿勢と謙虚でかつ熱心な探究心は歴史だけでなく、学問全般に通ずると感じた。

私は今回の合宿では、長谷川三千子先生の講義を興味深くうかがった。御講義は、道徳的な枠組みのない民主主義に対する警鐘であった。日本における民主主義の理念の一つとして、五箇条の御誓文が挙げられた。私の班では、御誓文はすばらしいと考えた人が多かったが、私はそのようには考えなかった。御誓文で「日本には民主主義的伝統があった」ということはおかしい。『舊來ノ陋習ヲ破リ』とか『智識ヲ世界ニ求メ』とかいう文言は、西洋列強をスタンダード＝世界ととらえた上で書かれているものである。このことを頭において考えると、『廣ク會議ヲ興シ』や『萬機公論』という言葉は、日本における伝統的な民主主義らしい思想というよりは、西洋の共和制をグローバルスタンダードであるとした上で用いられた言葉であるように感じる。民主主義に道徳が必要であるという考えには大いに賛成する。しかし、五箇条の御誓文のみを見て日本が民主的であったとは言えないし、それが今後の道徳的枠組みとなるかは疑問に思う。

自らの無知と無力を恥づかしく思へば学びにさらに励まむ
ヒゲソリで切りたる小指を心配し声かけくるる友ぞ嬉しき

日本人は素晴しい精神を持っている

（学習院大学　法　三年　藤尾允泰）

この合宿教室をとおして一番心に響いた言葉は「日本人はもっと自信を持つべきで、それが一番大事である」というペマ・ギャルポ先生のお言葉です。本当にその通りだと思います。やはり昔の日本人は素晴らしい精神を持っていて、それは例えば源氏物語の中に見る〝もののあはれ〟の精神や明治天皇の五箇条の御誓文の中に見る〝上下心を一にして〟の精神にあらわれていると思います。

先人の心に触れて我もまた平成の志士にならんとぞ思ふ

国を支へる一つの柱でありたい

（ハローワーク福岡中央　古川広治　42歳）

合宿を省みるとたくさんの先生方の御言葉や先人の残された文章がよみがへってくる。一人一人が国を支へる一つの柱でありたいと思ふ。そのために日本人であることを意識して生活すること、そして自分自身に自信と誇りを持てるやうになることが必要であると思ふ。この二点を心掛けていきたい。

その他に、合宿中に学んで取組みたいと思ったことを早めに手帳にメモをして忘れないやうに、また、班の皆と連絡を取りながら今の気持ちを忘れないやうに、日常生活に活かしていけるやうにしたい。

唱歌の紹介（とんがり帽子）

「おいらの家よおいらは元気」と戦災の孤児らの姿浮かび来るかも

「おいらの家よおいらは元気」とけなげなる姿浮かびて胸あつくなる

第六班—男子学生—

「もののあはれ」の大切さ

（熊本大学　法　三年　井上慶一）

カメラ・レポート8

短歌導入講義。東洋紡績㈱・庭本秀一郎先生は、短歌を詠むに当って①素直に表現すること。②何をどの様に感じたのかを具体的に詠むこと。③自らの心の動き（感動）を詠むこと。④正確な表現で詠むことの四点が肝要であることを語られた。

私は『第五十四回合宿教室』に参加して、一番心に残ったのは「もののあはれ」である。その講義を聞き、私は正しかったと確信しました。そして私はさらにこう思いました。「もののあはれ」は直接的に語るものではないと。私は「もののあはれ」を「人の心」と考えます。人の自然に出てくる感情がすべて「もののあはれ」なのです。少なくとも私にとってはそう言えます。何故なら「もののあはれ」はその人によって感じ方が違うからです。もし人が「もののあはれ」とは「よく分からないもの」と言えば、その人にとってはそうであり、すべての人に共通する答えはないからです。そして、逆に私はそういうのも「もののあはれ」であり、「人の心」だと思い、それが自分の中では正しいと思っているのです。

ただ、私はその「もののあはれ」は、理屈的に書くものではないと思います。「もののあはれ」は人の行動であったり、本を読んで本の中の登場人物の描写等、様々なものから自分が感じることができれば、その人には「もののあはれ」があると私は思います。感じる心が「もののあはれ」であり、『源氏物語』を単なる恋愛小説と読んでも、そこに何かを感じることが出来れば十分であります。

最後に私なりの「もののあはれ」とは何かを短歌で表します。

誰もいない部屋で一人でテレビ見る外では友らとやんちゃをしてみる

日本人であることに誇りを感じた

（西南学院大学　三年　平島賢次）

今回、第五十四回学生青年合宿教室に参加して多くのことを感じ、想いを馳せることができました。

まず一つ目に、改めて自分が日本人であること、それは誇りであり自信であることを感じました。歴史・文化・伝統を土台に日本人として生きることを自覚する。このことがどれだけ大事なのかを再認識した次第であります。

二つ目に、仲間と共に価値ある時間を過ごせたことが、楽しく、とても印象的で心に残っています。共に日本を語り合い、人生を語り合い、山登りや短歌を共有する。この経験は私に仲間の尊さを教えてくれました。六班の皆には本当に感謝しています。

そして三つ目に自分の夢への確固たる信念です。将来「真の国際人たる一流の日本人を福岡で養成する」という夢があります。この国の未来、この世界の百年後を引っ張る人材はどこから現れるのでしょうか？私はそんな人材を福岡という土地から、ぜひ輩出したいと思います。その為にも、もっともっと勉強をして、自らがそんな人材とならなければならない。そう感じました。

最高に熱い夏を本当にありがとうございました。

日の本の民であること悟りせば己の夢は達せられけり

尊敬の念を大切にしたい

（日本大学　四年　奈良崎大祐）

私は今回の合宿を通じて、何事に対しても「尊敬」の念を抱いていこうと感じました。なぜそのように感じたかというと、ペマ・ギャルポ先生のご講義と班別討論を通じて、日本人が本来持っている、人・モノに対する「尊ぶ心」というものが、世界の民族、国々の中で非常に稀であり、外国人からは感心され、そして尊い精神であるということを知ったからです。

「尊敬」の念を持ち、人に接するということは簡単なようでとても難しいことに思えます。占部賢志先生が話されたように、レッテルを貼るような接し方では、相手の考えを知ることも出来ず、信頼されるというような事はありえないように思えます。

それではどうすれば良いのかを考えた時、私は占部先生が言われた「心を動かす」ということが大切なのだと思いました。心を動かし相手の考えが身に沁みて分かるようになった時、初めて「尊ぶ」気持ちが心の底から滲み出てくるのではないかと考えました。物事に対しても同様、心を動かし感じ取ることが大切であると考えました。

日本人として、古来から脈々と受け継がれた尊い精神を、合宿を通じて改めて私も受け継ぎ、そして伝えていこうと思いました。

カメラ・レポート9

施設内の童謡の丘に立つ時計台の前で、小学生唱歌を朝の集ひの後参加者全員で歌ふ。

古来より受け継がれ来し日の本の尊ぶ心を我も継ぎなむ

たくさんの感動をもらいました

（福岡大学　経　一年　山崎智貴）

私はこの合宿に参加してたくさんの感動をもらいました。大山に登って感じた達成感と爽快感を味わえたのも感動したし、なにより自分の全く知らない世界から新鮮ささえ覚える多くの知識を得たことにも感動しました。

班別研修では、それぞれ全く考えの違う人達の意見を聞け、それもまた新鮮さを覚えました。最初はちゃんと自分の考えを言葉に表して自分の言葉で話している班のメンバーに若干圧倒されていたのですが、次第に自分の考えが自分の言葉で言えるようになり、この四日間で成長できたと感じました。この合宿を通じて感じたことは言葉を通じて昔の人の考え方や生き様を学ぶ時間を増やさなくてはならないことでした。

また、この合宿で学んだことだけで満足するのではなく、学んだことをこれからの生活で活かしつつ新たに多くの知識を吸収したいと考えます。

友どちと共に学びて早四日いつもの日々より充実したり

合宿の持つ不思議な力

（㈱アルバック　北浜　道　47歳）

閉会式を迎へ合宿の持つ不思議な力を噛み締めてゐる。三日前に初めて出会つたのに今はもう別れるのがつらい。まだ一緒にいろいろ話をしてゐたい、といふことだ。

普段は世間的に正しく行動するため抑へてゐた心が、この数日間精一杯働かせることで思ひ切り解き放たれ、本来の素直さを取り戻すためか。

情緒といふ言葉がある。今では主に論理的でないといふ消極的、否定的意味でしか使はれないが、字面からして人の心と心を何かで繋ぐといふ積極的意味がある筈だ。繋ぐのか繋がれるのか定かでないが、いづれにしても情緒といふ人生の事実があるゆゑ感じられる感慨なのだと思つた。

今林賢郁先生の御講義にて、寶邉正久先生が松吉正資大人について話された御文を読みて

いくさ場に出でます友のお心を偲びます御文を辿りましけり
はらからと友ら偲びつつふるさとにひととき過します大人を偲びぬ
あたたかき御心こもる御歌読み大人の姿の偲ばるるなり
沁むごときかなしき御歌を読みゆけば御心迫り胸のつまりき

学生の率直な考へ方を聞くことができ頼もしく思った

（㈶交通事故総合分析センター　小田村初男　59歳）

今回の合宿は各先生方の力強い御講義があり、更に班別の研修にて内容を深めることができ、有意義であった。

今回初めて、学生班の班付をしましたが、御講義を振り返り、各人の分からない所を皆で確認しながら、理解を深め感想を述べ合ふ中で、今の学生の率直な考へ方を聞くことができ、頼もしく思ひました。御講義では、ペマ・ギャルポ先生が、今回はチベットの悲惨な状況には触れられずに、日本の現状に警鐘を鳴らし、日本人に自信と誇りを持って、国際社会をリードするやう強く促された事が深く印象に残りました。

日本人よ誇りを持てと励まさる強き御言葉心に沁み入る

第十一班―女子学生―

体験と学問を積み重ね千秋の人となりたい

（日本青年協議会　三荻　祥　25歳）

今回心に残った言葉は福澤諭吉の「国の独立如何に係る所の事に逢へば、忽ちこれに感動して恰も蜂尾の刺蠆に触るゝが如く、心身共に鋭敏ならむことを欲するのみ」だ。今林賢郁先生はビリビリっとするような精神の鋭敏さと仰ったが、今日の政局国際情勢等をみる中でその様な感性を養っていきたいと思った。また占部賢志先生のご講義では勇気をいただく思いがした。吉田松陰先生は、自らの無知を自覚し尊皇体験をすることで新たな学問の道が開かれ、「偉人」と呼ばれるようになった。このことを知ることで、自分には力がない

カメラ・レポート10

短歌創作を兼ね、野外研修では貸切バスを利用して、大山の中腹にある阿夫利神社に参詣。自然と歴史に触れる一時を過ごした。

と悲観する必要はないと思った。同時に、ここにきている一人一人も体験と学問を積み重ねれば千秋の人となれる可能性を持っている、との占部先生からのメッセージも含まれていたのではないかと感じ、そのような一人となっていきたいとの思いを強くした。体験と自己研鑽を重ねつつ千秋の人となれるよう励んでいきたい。

国思へば蜂尾の刺蠆に触るるごと感ずる心をもちてゆきなむ
もろともに七沢の地にて学びたる一日一日を忘れず思へや

心に残った福沢諭吉の言葉

（筑紫女学園大学　文　三年　井崎恵美）

心に残ったことは福澤諭吉の「一身独立して、一国独立すること」という言葉です。そのなかで、「独立とは自分にて自分の身を支配し他に依りすがる心なきを云ふ…」とあり、今林賢郁先生は自分の言動に責任をもつことだとおっしゃっていました。自らを省みてみると本当に言行一致できていないと痛切に感じます。心にもない言葉を安易に出したり、自分に嘘をついたときには苦しいと感じます。國武忠彦先生のご講義で光源氏が、横恋慕した柏木が病気になったときには心配して見舞ったり、柏木の両親に対して心を寄せて悲しむ姿は本当に立場や地位を越えて人の思いに自分の心を重ねていく温かさや共感の世界を感じました。この心を持って自分の身は自分で修め、さらに役割を任じて背負うところに独立があり得るんだと思われました。

自分軸を持ち日本を好きになってほしい

（福岡大学　商　四年　飯田佳保里）

ペマ・ギャルポ先生が「日本が好きだ」と言って下さり、日本人である私はそこまで日本を深く知らず愛国心があまりないと感じ、このままで終わらせたくないと思いました。

また「一身独立して一国独立す」という言葉が胸に響きました。今の日本人は、誰かに頼りすぎている、一人で行動することができないなど、意志が弱い人が多いと感じます。一人ひとりがきちんと自分軸をもっていれば、日本の政治、経済、日本国という中身のある国ができると思います。私はこの合宿で、意識の高い仲間と出会うことができました。ここで学んだことを周りの人たちに伝えていくことから始めようと思います。そして、より多くの学生が、この合宿に参加し、日本を好きになってほしいです。

日本はアジアをリードできる精神文化を持っている

（福岡大学　商　三年　西村美緒）

私は今回初めてこの合宿に参加させていただきました。合宿で様々な先生のご講義を聴かせいただき、班別研修を通して理解を深めていく中で、自分の勉強不足を感じることも多々ありましたが、考え方や視野を広げる貴重な体験になり

ました。ご講義の中でも特にペマ・ギャルポ先生のお話が印象に残っております。先生は、日本はアジアをリードできる精神文化を持っている、日本はもっと自信を取り戻すべきだ、日本の〝おかげさま〟の精神、日本人の謙虚な姿勢と強い信念は素晴らしい、とおっしゃっていました。その言葉を受けて、私も日本人の一人として、とても嬉しく思いました。日本のことは大好きなのですが、今回先生のお話を聴き、日本のことをもっと知れば、ますます好きになれるのではないかと思いました。私も日本人の一人として、仕事に対する倫理観、他人に対する思いやり、おかげさまの精神を持ち、日々勉強を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

コンビニもお菓子もテレビも我慢して臨みし合宿の宝となりぬ

同世代の人と日本の事を話せたのは一生の宝

（総合学園ヒューマンアカデミー福岡校　一年　森田恵見里）

この合宿は父の紹介で来ましたが、和歌も古典も苦手だったので、周りに劣って居づらくなるのではと思っていました。ですが、長谷川三千子先生の「民主主義」のご講義は、大学の講義で学んでいたこともあり楽しかったです。「大山」散策では、女坂はハンパなく汗だくになり、精神力が鍛えられました。班付の寶邉矢太郎さんと話すと、私たち以上の経験からいろいろなことを学べました。また、皆も言っていましたが「この班でよかった」と本当に思いました。日本のこと、

国際情勢講義。桐蔭横浜大学大学院教授・ペマ・ギャルポ先生は、チベット人であるが日本国籍を得た方で「アジアにおける日本の役割」と題してアジアの国々は日本に期待していると話された。

日本人としての皆の考えを、同世代とこんなに会話できたことは一生の宝だと思います。慰霊祭も普段は絶対体験できないことで、すごい体験でした。また吉田松陰の、侮辱されても前に進んだ姿は見習いたいと思います。ペマ・ギャルポ先生に言われたように、日本人としての誇りを持って、これからも日本文化を学び、世界に誇れる日本人になります。四日間、ありがとうございました。

先人の古き教へを繙きて日本の誇り我今持たん

とても有意義な夏休みになった

（亜細亜大学　国際関係　二年　三輪夏美）

大学の先生に勧められるままに来た合宿ですが、三泊四日、班の仲間達、班付き寶邉矢太郎先生、講義をして下さった先生方、スタッフの皆さんのおかげでとても有意義な夏休みを過せたと思います。「もののあはれ」とは何かを知り、聞いたこともない童謡を歌い、私の中で歴史上の偉人でしかなかった吉田松陰をとても身近な人として感じることができ、聖徳太子、歴代天皇、今上陛下のお言葉を教えて頂き感動しました。また初めて出会った人達と他愛もない話ができるまで仲良くなるなんて初めての体験でした。

合宿に初めて出会ひし友どちと日の本のこと語り合ひけり

第十二班―女子学生―

日本人であること

（福岡大学　経　一年　渡邊はるか）

今回初めて国文研の合宿に参加させて頂き、本当にたくさんのことを得ました。一番に感じるのは、いかに自分が無知であるかです。講義を聴いても全く知らないことばかりで、学ぶ楽しさ半分、戸惑い半分でした。講義のあとの班別研修でも、感想は言えるけどそれより先につなげることができず大変でした。年齢も職業も全然違う人と意見を出し合うのはとても面白くて、様々な考え方を吸収できました。この合宿で「日本人であること」をとても考えさせられました。私は日本人なのに大して日本の事を知りません。だから日本に誇りを持つこともなく何も考えず生きてきました。だけど講義を聞いて日本をもっと知りたいと思ったし、誇りを持ちたいと思いました。

来るときは嫌々つめし荷なれども帰るとなると名残惜しくて

慰霊祭で厳粛な気持ちになった

（アトラスコプコ㈱　森田暁子　33歳）

今年は二回目の参加となりましたが名簿をみて驚いたのは、

私が班長になってゐたことです。前回は講義を聞き指導される側だったのが一転、班別研修で司会をし、まとめるといふ大役をすることになりプレッシャーでした。

講義では〝もののあはれ〟が曖昧なものにしか見えずにゐたのが國武忠彦先生のお話で視界がすっと開けて来たやうに理解できました。光源氏は女々しいのかも知れませんが人間の感情をあからさまに表現したことで男女に感情の違ひがないことを平安時代に書き綴ったことは大変衝撃的なことだと思ひます。

野外での慰霊祭は厳粛な気持ちになりました。我々の祖先はあのやうな儀式を経験してゐるのかと思ふと、それがなくなった現代の日本は文化が音も無く消えてゐるやうで本当に残念でなりません。

ペマ・ギャルポ先生の御講義を拝聴して
師の君が日本のよさを語られて吾らの文化の素晴らしさ知る

日本の文化をもっと知りたい

（福岡大学　経　一年　伊藤彩華）

私は今回の合宿で多くの事を学びました。特に、日本の文化の深さを知りました。昔の人達は文化を大切にして自分の国のために尽くしていた。学校の勉強で忠孝という言葉を習いました。忠は忠誠で、孝は親孝行という意味で現代の人は孝は分かるけど、忠は現代の日本ではなくなってしまったな

講義「体験と思想－千秋の人吉田松陰」で福岡県立太宰府高校教諭・占部賢志先生は「吉田松陰は明治の指導者を育てた立派な教育者とよく言はれるが、さう規定した瞬間その人は松蔭の内面を知らうとしなくなる」と述べられた後若き日の松蔭の勉学への真摯な研鑽の様子を語られた。

と思いました。

外国から日本の文化はすばらしいと言われている。しかし、今の日本人は自信がないと思われている。確かにそうだなと思いました。日本の文化というものや、歴史を知らなくてどこに自信を持てばいいのだろうと思いました。これからもっと多くの歴史を学び自分の気持ちがすぐに反映される短歌などに接する機会を増やしていこうと思いました。今の自分にできることは日本の文化をもっと知り、その文化を広めていくことです。

学び舎で講義を聞きて我の知る日本文化のすばらしさかな

ことばと心を一致させたい

（九州女子大学　人間科学　四年　小野香美）

占部賢志先生が、教育者吉田松陰とレッテルを貼って見るので無く、松陰の心にどこまでも付いていく見方をと冒頭で話されました。松陰先生の尊王の心は多くの体験から得た思想、心であったと思われてきました。私が自分自身、もっとこうありたいなと思ったのは、ことばと心を一致させられるようになりたいということでした。短歌相互批評の中で言葉をより正確に表現することの難しさと嬉しさを感じました。細かいところまで整えていくことで自分の心がすっきりとするのを感じられ、心がどう動き、何を感じ、何を思っているかがわかり、自分のことを本当に分かることの喜びと自信がわいてくるように思いました。

みづからの言葉と心を合はせつつしきしまの道を歩みゆきなむ

疑問や違和感のもとをたどること

（正眼短期大学　二年　田邊さやか）

初めてこの合宿に参加し、衝撃ととまどいを感じました。講義を聞き、違和感や場違いなところにきてしまったという思いもありました。これまでの自分の考えとは異なる話をどのように受け止めたらよいのかというとまどいを感じながら、きちんと反論ができないのは自分がその問題と対峙してこなかった為、物事を判断する素地がない、これまで自分の考えと思ってきたものは事実では無く多くの情報の中からできたものだと気づきました。國武忠彦先生のお話にあったように心をもっと動かして、物事に敏感に反応し、その起こった感情をただ流してしまうのでなく、疑問や違和感を感じたならそこからそのもとをたどってゆくという作業を怠ってはいけないのだと感じました。

合宿で聞きし講義に疑問いでてものを考へる契機となりぬ

もっとたくさんの意見に触れたい、学びたい

（日本歯科大学　歯　四年　小泉喜代子）

海外へ出かければ「日本人です」「日本が好きです」とはっ

きり言えるのに、では「どこが好きか?」「日本の歴史についてどう思う?」などと問われたら上手に気持ちを伝えられない自分に日頃からもどかしさを感じていました。

今回の合宿で先生方の講義を聴き、班員と討論するなかで自分の無知を恥じました。自分の知識の無さゆえに自分の考えを述べることが出来ない現実、でも自分が貪欲に学ぼうと思えばいくらでも機会が広がっていることの幸せも同時に感じました。私は今、カラカラに乾いたスポンジです。知識という水があまりにも不足している。今はもっと沢山の意見に触れたい、学びたいと思っています。正しい知識を深められる場所、意見を交換できる友人に出会えた事が一番の収穫です。

夏休み初めて会ひし友達と学びたること嬉しかりけり

孝明天皇のお姿に感動した吉田松陰

（國學院大学　文　二年　椛島明実）

印象的なご講話は占部賢志先生の「体験と思想」でした。吉田松陰先生については松下村塾や獄中で仲間と勉強した、ということくらいしか知りませんでした。多くの偉人を育てた教育者というイメージですが、若い頃からそうだった訳ではなく、外の藩の人に侮辱され、国学について勉強しようと思うが、そこでも自分との葛藤があり、もがき苦しまれたということを初めて知りました。その中で決定的に松陰先生を

カメラ・レポート13

熱心な眼差しで講義を聴く参加者達。

変えたのが、公家が積極的に助けないなか、孝明天皇が日本を守ろうと頑張っておられるお姿に感動して勉強を始められたということでした。私はそのお話を聞いてやはり、いつの時代でも、天皇陛下は日本国民のことを想われていて、それに感動し、心を寄せるということは、本当に大事であるな、と思いました。和歌の勉強もしていきたいと思います。

新しき友らと共に学びゆき時たつうちに仲良くなりぬ

第十三班―女子学生―

今上陛下御即位二十年を後輩と心一つにお祝いしたい

（福岡教育大学　教　四年　岩見智世）

吉田松陰先生の内なる尊皇体験が心に残りました。「御藩の人は日本の事に暗し」と言われたことを恥じた松陰先生は皇国の皇国たる所以を猛勉強されました。岸本弘先生が「清く明るいものに触れたとき心が素直にパッと反応できるか」と言われたように、孝明天皇の祈り、ご憂念をお偲びしつつ、御心に敏感に反応していかれたのが松陰先生の学びであられたのだと「拝鳳闕」の詩の悲泣されるお姿から感じました。今上陛下の御心を正しくまめやかにお偲びし、敏感に自分の心が反応するよう私も心を働かせたいと思います。

合宿で班員が心を開き互の心を偲び合おうと努力しました。ペマ・ギャルポ先生が家族や国家が共通の夢や目的を持ってこそ大きなエネルギーとなり時代を動かす、と仰いました。私は大学の教育系サークル部長として後輩と心一つに、今秋、今上陛下御即位二十年をお祝いし感謝を表したいと思います。

和歌相互批評をしていただきし折に

吾の思ひよく分からぬと友どちが伝へてくれしは有難きかな

班員の素直なる思ひを飾らずに述べてくるるはうれしかりけり

「日本はもっと自信と誇りを持つべき」という御言葉

（福岡大学　経　一年　今川聡子）

初めて参加しました。講義は中身が濃く、私には内容が難しく、あまり理解できなかった講義もありましたが、その後の班別研修で感想や意見を出し合い、再度確認できました。

印象に残った講義はペマ・ギャルポ先生の「アジアにおける日本の役割」です。日本はもっと自信と誇りをもつべきだという言葉がずっと頭から離れません。

私には台湾人の友人がいますが、小学生の頃、「台湾には国旗がない、と他国の人にからかわれて、とてもショックだった」と言っていたことを思い出しました。小さい頃から自分の国に対する誇りを持っていたことに気付きました。

合宿に参加して同年代でも深く考えている人に出会い、もっと勉強が必要だと感じました。

日の本に生まれたことに誇りをもつ偉人の勉強続けてゆかん

「日本」という国のよさを感じた

（福岡大学　経　一年　壬生毬絵）

今回初めて合宿に参加しました。合宿では、いろんな面から日本について学び「日本」という国のよさを感じました。また、班別研修の時には同世代の学生の方が自分の意見をはっきり持っていて知識が豊富であり、私と同じ学生なのにこうも違うのかと感じ、もっと勉強しなければと思いました。この合宿からは、本当にいろんな刺激を受けることができ、日常生活では得られないことを得ることができ、よい体験となりました。そして、ペマ・ギャルポ先生がおっしゃったように倫理観・公共心・思いやりを持った人になり、いつまでも「おかげさま」の精神を忘れずにいたいです。最後になりましたが、運営を行ってくださった方、サポートしてくださった方、ありがとうございました。

おかげさまその一言に込められし思ひの深さを肌で感じぬ

二度目の合宿に参加し学びが深まった

（エアロビクスインストラクター　清水智子　25歳）

今回は二回目の参加です。昨年はハードスケジュールな合宿についていくのに精一杯でしたが、今年は少し心に余裕を持ちました。先生方の御講義の中から何かを得よう、何か自分の中に芽生えさせたいという気持ちで聞きました。しかし、

講義を聴いた後、班に戻りレジメをもとに輪読や感想を述べ合って班員同士による研修を深める。

勉強不足、知識や表現力の乏しさを思い知らされました。昨年よりも今年、今年よりも来年、学んだことをしっかりと育てていけるような自分でありたいと強く思いました。

昨夏、共に学び語らった仲間、先輩方、先生方との再会はとても嬉しいものでした。一年のうちのたった四日間ですが、密度濃く充実した時を共にしたからこその喜びの大きさです。国民文化研究会のすばらしい、尊敬すべき方々の中に身を置かせていただけることに心より感謝しています。

合宿を終へて都合により皆より先に帰る折り
一年後また会へるかなと思ひつつ我れ先に発つなごりをしけれど

日本の素晴らしさと課題に気付いた

（明治学院大学　文　三年　中村友紀）

一番印象に残ったのはペマ・ギャルポ先生のお話です。「お陰さま」という言葉は私たち日本人は当たり前の様に使っているけれど、大切な忘れてはいけないものなのだと気付きました。日本は良い国なのだということも改めて感じました。しかし、先生が日本のこれからやるべきことを指摘され、アジアの一員としての自覚を持つこと、「日本らしさ」を取り戻すことなどのような課題にハッと気付かされました。

合宿にて多くを学び考へしことを糧とし今ゆ努めむ

古事記と源氏物語はつながっていた

（九州女子大学　人間科学　三年　西山志織）

一番心に残ったご講義は國武忠彦先生の「もののあはれを知る」です。それまで『源氏物語』をラブストーリーぐらいにしか認識していなかったが、まことのこころをつまびらかに表す日本人の精神が述べられていたのだという驚きがありました。丁度『古事記』を学んでいたこともあり、それまで全くつながりが感じられなかった『源氏物語』と『古事記』がこのような精神でつながっていたのだと感動しました。

自らの心のうちに留めたるやまと心を言葉にしたし

短歌班別相互批評で心と言葉の流れから力を感じた

（東北大学　法　一年　齋藤瑠奈）

私が一番印象に残ったのは、短歌の班別相互批評でした。他の芸術作品と異なり、他の人が思ひついてくれた言葉を活用して自分の歌をよりよいものにすることができる、このことが異様な感じがして不思議に思ひました。しかし、さうした中で、なんともいへない心と言の葉の流れが生まれました。その流れから、これまで味はったことのない、一種の力を感じました。その時間は、楽しいものでした。そして、何人かの人が私は言葉に鋭いと言って下さいました。

歌つくりことばをかはしてゆくうちに知らず知らずに心は通ふ

真面目な女子学生の向学心に感心した

（鎌倉の教育を良くする会代表　山内裕子　53歳）

晴天に恵まれ楽しく充実した二回目の合宿でした。思いがけず班長として女子学生班の一員に加えていただきました。教職を目指す二人の学生が皇室や伝統文化を大切に思い、日本人の心を養う小学校教師を志していました。熱心に講義を聴き、自分の頭と心で納得するまで理解を深めようとされ、初参加の一年生の話を引き出し、班員が心を開き共感し合うよい雰囲気作りをリードしてくれました。

大山散策は班ごとの行動でしたのでケーブルカーに乗らず、上り道を必死で登りました。体を鍛え、これからもいろいろなことに挑戦したいと思います。

講義も催しも味わい深く、ハッと気付かせていただき心に触れることの多い学びの場でした。感謝申上げます。

若人ら大きな夢をふくらまし一日ごとに逞しくなる
団栗の小さな木の実落ちてきて緑の山に秋近づきぬ

第二十一班―社会人―

姿をありのままに捉えることが重要

（NPO法人教育オンブズマン　日下部晃志　32歳）

カメラ・レポート15

創作短歌全体批評として、熊本市東部環境工場長・折田豊生先生は前日創作された参加者全員の短歌の中から班毎に一首を取り上げ、より表現の豊かな短歌に添削されて行かれた。

三泊四日の共同生活で、班別研修のみならず、移動、食事の配膳など様々な点で一致協同出来たことは大変嬉しかったです。集団で行動することは日本人の特質、美質を見直す上で大変重要であることを改めて思いました。

講義については様々思うところがあり、紙幅が足らない程ですが、全体を通して感じたのは、長谷川三千子先生のお言葉を借りれば、日本の姿（国体のみならず、制度、法律、国民気質等々）の「素顔」を一度のぞいてみることが重要だということです。国や人間、自分の姿をありのままに捉えることは至難の業かも知れませんが、本合宿ではそれに取り組もうとする動機付けを頂きました。

妻子らにまづは伝へん合宿（つどひ）にて友と学びしわが国のこと

素直な気持ちを伝える難しさと楽しさ

（日本植生㈱　伊集院文隆　30歳）

「皆さん、おかげ様で三泊四日、本当に楽しくこの合宿を終えることができました。」研修最後の班別懇談での第一声です。三泊四日、生活や学びを共にさせて頂いた先輩や仲間たちに伝えることができた素直な私の気持ちでした。今回の研修では、自国である日本の事に関する無知を恥じながら、多くのことを学ばさせて頂きました。その中でも短歌を詠むことの難しさ、自分の素直な気持ちを相手に伝える難しさを知りました。そして同時にその楽しさを味わいました。

それは短歌に日本語の奥ゆかしさがあるからではないかと感じています。日本文化に触れた瞬間です。私はこの日本語をこれからは意識して使い、また味わい、そして楽しんでいこうと思います。

合宿を終へて

日本のこと知らざることを恥ぢつつも思ひ出さるる長き石段

学校では習わなかったことを学んだ

（㈱ビッグ・エー　梶原岳海　28歳）

私が今回の研修で最も印象に残ったのは占部賢志先生の「体験と思想」の講義でした。先生が講義の初めに、「偉人を見るとき、偉大な人だというレッテルをはったり、欠点を並べて引きずりおろす二つの見方をしがちであるが、偉人の心を見ないと大事な部分は見えて来ない」と話されるのを聞き、自分が学校などで習ってきた勉強の仕方では見えて来ないものがあることを痛感しました。

合宿で友といっしょに語らひて先人たちの心偲びゆく

この恥ずかしさを糧に、あるべき姿を目指したい

（㈻中村学園　佐藤啓介　24歳）

今回、この合宿教室に参加させて頂き、誠にありがとうございました。私はこの合宿で自分が日本人であるにもかかわ

らず、いかに日本について知らないか気付かされました。先生方の講義や班の仲間の思想を聞いて、とても恥ずかしくなりました。この事に気付いた事は一つの成長であると思いますので、この恥ずかしさを糧にして、日本人としてのあるべき姿というものを目指していこうと思います。

国文研の皆さん、参加者の皆さん、ありがとうございました。

合宿にて学びし事の大切さ戻りて伝へん我が友達へ

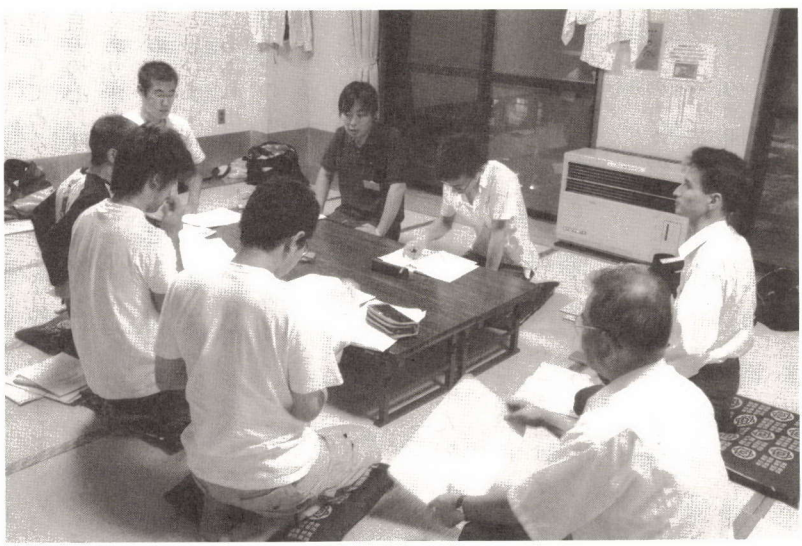
恥ずかしくない大人になろう

（㈱ビッグ・エー　山口裕章　26歳）

三泊四日の研修を終え、まず思うことは、どれだけ自分が無知かということと、日本という国をどれだけ知らないのかという事でした。班別研修では話を聞くだけになってしまい、意見を聞かれてもうまく話せず、本当に恥ずかしく思いました。皆さんに追いつくということは言えませんが、少しずつでも勉強し、恥ずかしくない大人になろうと思いました。

また、社会人になってから、住むところや、仕事の違う方々と共同生活をすることがありませんでした。仲間の様々な意見、体験、考え方など、自分にとってはとても有意義なものでした。ここで出会えた仲間に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

いつの日か生まるる我が子に必ずや教へてゆかむ古き良き日本



班別による短歌相互批評。班員の歌を一人一首づつ作者の気持ちを確かめながら、歌の表現をより的確になるよう皆で添削して行く。

自分の世界が少し広くなった

（㈱ハウインターナショナル　祝原正典　22歳）

今回の合宿教室には初めて参加させて頂きました。きっかけは会社からの誘いで、正直、それほど乗り気ではありませんでした。しかし、初日、二日目と、次第に学び研鑽する事が楽しくなりました。最終日の今は、共に学んだ友との別れが寂しくなり、もう少しだけ時間が欲しいとさえ思います。

この合宿で、志高く本当に日本のことを考えている仲間達と出会い、自分が今までどれだけ小さな小さな世界に居たのかを痛感致しました。日本の事も良く知らず、天皇陛下のお仕事やお心など考えることもせず、ただ自分の小さく凝り固まった世界観だけで日本という国を否定していました。しかし、この合宿での今林賢郁先生、國武忠彦先生、ペマ・ギャルポ先生らのご講義と仲間達との語らいの中で自分の世界が少し広くなりました。

待ちわびしが今は寂しき最後の夜酒を飲みつつ友と語らふ

君臣の間の暖かい心の交流

（調神社　岸野克巳　41歳）

最終日の全体感想発表で、天皇皇后両陛下御大婚五十年奉祝にあたり、単なる知識ではなく、「奉祝」といふことのこころをよく自ら味はつて他人に伝へていきたいといふ意見もあり、また吉田松陰の「拝鳳闕」の「野人悲泣して行くこと能はず」は天皇陛下のお苦しみお悲しみを察し申し上げて「悲泣」してゐるのだといふ意見もありました。いづれも皇恩を自らの心に味はつて知らうといふ心のあらはれと思ひ、嬉しくありがたく聞きました。我が国の礎をなすのは、君は民を思ひ、民は君を思ふといふ君臣の間の暖かい心の交流であると思ひます。誰の心にもこの礎はあつて、時至れば泉のやうにあふれ出てくるものだ、合宿に参加してさう感ずることが出来たのはまことに楽しく喜ばしいことでありました。

五箇条の御誓文
あめつちの大き道にぞ基かむと詔（の）らす御言（みこと）をつつしみて読む

自らの学問を再スタートさせたい

（㈱日立製作所　松井哲也　50歳）

九年ぶりに合宿に参加した。今一度自分の人生を見直すつもりで来た。そして。自分の人生の根幹はやはりここにあると思つた。

多くの方々の力でこの合宿が続けて来られたことを本当に尊く、そして有り難く思ふ。

自らの学問を再スタートさせたい。まづは古事記を通して読むことに取り組みたい。

もう一点、「全体感想自由発表」の一番最後の方が「家に帰ったら新婚の妻に『君のことを歌に詠むよ』と伝へます」と語

られた。私はハッと気付かされた。私は身近な人に対して歌を詠んだことがない。まず私の家族に歌を詠んでみようと思ふ。

占部賢志先輩の御講義

若き日の松陰大人は日の本の歴史知らずとの言葉に驚く
あまたなる言葉辿りて松陰の「悪戦苦闘」を語り給ひぬ
松陰の姿うつつにある如く語り給ひし力かしこし

言葉の大切さを思い知らせて貰った

（SIS㈱　内田厳彦　63歳）

今年の合宿では言葉の大切さを思い知らせてくださるご講義が多く、大変有り難かった。占部賢志先生のご講義での言葉で「古人を知るには遺された文章を読むしかない」とか、國武忠彦先生の古典導入講義の中に出てくる源氏物語の「もののあはれ」は、文章を正確に辿ることなしには知ることは不可能だと思った。古人の文を正確に辿り、心を鍛え、古人の心を知る程の感性の力を持つことが、今林賢郁先輩の言われた「一人一人が国を支える柱」に繋がると思う。

班員は社命で来られた人が多かったが、合宿期間中の取組みも真摯活発で、良い雰囲気の班であった。楽しい充実した三泊四日を送らせて頂き、感謝している。

古の人の御文を辿らなむ御国のいのち知るほどまでに

カメラ・レポート17

国民文化研究会会員による青年体験発表。㈱寺子屋モデル・横畑雄基氏（写真右）は、学校教育の欠陥を補ふべく各地の幼稚園や企業、神社などで展開している偉人伝講座をドイツの日本人学校でも行はれた時の様子を語られ、㈱伊佐ホームズ・小柳雄平氏（写真左）は、建築設計の仕事をする上で勇気付けられた正岡子規等の言葉を語った。

第二十二班―社会人―

さまざまな繋がりを感じた

（㈱致知出版社　永廣理人　23歳）

初参加であったが、素晴らしい会の存在に非常に感動させられた。五十四年間、続けてこられた先輩方に尊敬と感謝の念を先ず表したい。

合宿で私は、「繋がり」を感じさせて頂きました。自分の親や祖父母程の年代の方との繋がり、先人との繋がり、など普段はあまり出会うことのないさまざまの繋がりを感じさせて頂きました。特に慰霊祭は初めての経験でしたが、戦争で亡くなられた方との、日本人としては決して忘れてはならない歴史ある繋がりを感じました。

班別懇談にて

時忘れ日の本想ひ語りあふこれぞ富国の姿ならずや

本質を学ぶ場

（國學院大學栃木短期大学講師　濱口和久　40歳）

久しぶりの夏合宿参加。この夏合宿の最中にも衆議院の総選挙が行はれて居るが、各党とも国民に対するバラマキ政策のオンパレードで、国家の基本となる問題は蔑ろにされて居る。

合宿で学ぶ内容は、時代が移っても普遍のものである。日本の本質、もっと言へば「日本の品格」について学ぶ機会を与へてくれる場所が夏合宿だといふことを改めて痛感した。

四十才を過ぎ、今一度、勉強（学び）をしっかりとしたいと思ったこの合宿期間だった。

若者（学生）の全体感想自由発表を聞いて

若者の感想聞きて我れ思ふ学びの成果日の本かへる

心を鍛える

（出光石油化学㈱　広島秀明　51歳）

十四年ぶりに参加した。参加のきっかけは五十歳を過ぎて体力の衰えを感じた時だった。スポーツ医学の先生から「五十歳を過ぎたら体力を維持することが大変になる。維持するには体を鍛えなさい」と、アドバイスされた。その時、体と同時に、心も徐々に衰えていることに気がついた。よって、「自分の心を鍛える」ことができたらとの思いで参加した。

合宿は、全てが心を動かしてくれるものばかりだった。今林賢郁先生の「心友」、國武忠彦先生の「人の悲しみがわかる」、庭本秀一郎先生の「よい歌は心に残り、心に力を与えてくれる」、そして占部賢志先生の「その人の心の中を覗こうとしなさい」というお言葉を特に印象深く伺った。これからも「心を鍛える」ことを忘れぬように、精進したい。

占部賢志先生のご講義を拝聴して

松陰の心の中をたづぬれば辱められどひるむことなし

充実した三泊四日

（㈱ビッグ・エー　原口京史　27歳）

今回、会社よりの命で、初めて参加した。今まで、日本の文化や学問に触れる機会があまりなく、参加にあたり、自分に教養が無いことに、言い知れぬ不安があった。

しかし、いざ参加してみると、教養の無い私でも、理解しやすい講義や、気さくな先輩と共に勉強でき、自然といにしえの思いや、戦中戦後の人々の心を知ることができたような気がする。また、大山散策も、大変だったが、良い思い出になった。心身共に充実した、最高の三泊四日を送ることができた。

今、この文を書いている時も、名残惜しくてたまりません。合宿運営委員会、国民文化研究会、そして共に学んだ同胞に、心から感謝申し上げます。有難う御座いました。

ますらをの覚悟の魂身に沁みて斯く在りたしと吾思ひけり

心を奮ひ立たせる炎と希望を得た

（㈱ビッグ・エー　浦野洋介　28歳）

私は最近日本の将来を悲観してゐました。政治や世情を見

カメラ・レポート18

祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての御霊をお慰めする慰霊祭について、その趣旨と祭儀の手順が懇切丁寧に説明された。

ると憂ふることばかりで、世間の風俗の乱れや思ひやりの無い行為を見るにつけ、「ああ日本はだめになってしまったんだ、このまま日本といふ国はなくなってしまふのか」と思ってゐました。しかしこの合宿に参加して、学生さんたちのエネルギーあふれる姿や同じ班の人達の高い志に触れるにつれ、自分の一人よがりの考へや、中途半端な知識を猛反省させられました。この合宿で私が得たのは知識や思想ではなく心を奮い立たせる大きな炎であり、希望でした。

魂の叫びを聞けよと大音声冷めた心に大火をともす

心に火を付けられ尻を叩かれた感じだ

（㈱はせがわ　石原　学　29歳）

私は会社で採用担当の仕事をさせて頂いており学生の心に火を付け、尻を叩いておりますが、今回の合宿では私自身が心に火を付けられ尻を叩かれたと感じております。また、短歌創作を通じて、素直に自分の心の中の感動を見つめる術を学びました。短歌にすればその感動を心に止め、いつでも振り返る事ができることや、自分の歌を読んで頂いた方にもそれをお伝えできること、素敵なプレゼントを頂いた気持ちで一杯です。

明日からは素直な気持ちを歌にして心に留めん素敵な毎日

一層の勉強が必要

（亜細亜大学　平槇明人　54歳）

今回も大変勉強をさせて頂いた。國武忠彦先生からは「源氏物語　もののあはれを知る」の御講義を通して『源氏物語』と『古事記』そして「本居宣長」との密接なる関連を御教示頂いた。ペマ・ギャルポ先生からは、「日本人としての自信」を持ってアジアに係はって行くべしとの御教示を頂戴した。占部賢志先生からは「読書尚友」の大切さを御教示頂いた。

そして、短歌を詠み続ける事の必要性も改めて痛感した。何れにしても、一層の勉強が必要である。皆様に感謝申し上げます。

童謡「里の秋」の御説明を伺って
敗れたる民の力となりにける「里の秋」てふわらべ歌はも

第二十三班―社会人―

自分のルーツを深く考えたい

（福岡大学経済学部教授　阿比留正弘　56歳）

私は今回の合宿に参加し、これまで置き去りにしてきたことや自分自身のルーツについて深く考える必要性を感じた。私の父は神主であり、毎日聞いてきた祝詞の言葉の意味をき

ちんと考えてみたくなった。また、祖母の弟が「国崎定洞」という日本のマルクス主義成立の基礎を築いた人であり、そのマイナスの影響もきちんと整理してみたい。

七沢に集ひし仲間の日本の誇りを知りて目が輝きぬ

日本人としての自信と誇りを

（神奈川県立大船高校教諭　中村正和　55歳）

日本の将来を担う若者を育てようとの皆さまの志がありがたく、先ずに、自分の息子と娘をと思い、今年は娘を連れて受講、お陰さまで父と娘が正面から向き合う初めての語らいの時を持つことができました。また、私は、ペマ・ギャルポ先生の御講義に感銘を受け、「チベット問題」「アジアにおける日本の役割」をさっそくプリントし、新学期の冒頭一時間の授業を行いました。今の日本の一人でも多くの若者たちに「日本人としての自信と誇り」をと切に願い、これからも高校の現場で子どもたちに向き合おうと誓いを新たにしました。

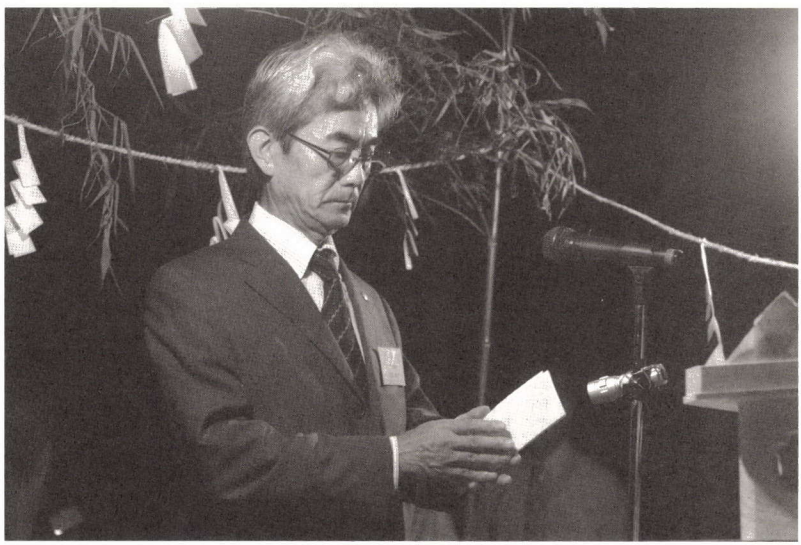
大山に集ひし友らのやさしさに娘と二人まごころを知る

過去の歴史を学び短歌を心の柱に

（㈱はせがわ　田中秀昌　34歳）

過去を学び短歌を心の柱とし、日本人として人生の軸がぶれないようにしようと決意した。「私は先祖の未来です」と

カメラ・レポート19



合宿最後の夜を迎へ、施設内の野外広場に祭壇が設えられ、厳かに慰霊祭が営まれた。写真は祭の冒頭における御製拝唱を行ふ㈱東急建設・奥富修一氏。

いう言葉があるが、私もいずれ未来の人の先祖となるので、先人に恥じない生き方をしようと思う。

過去を学び短歌の心を柱とし日本の心を伝へゆきなむ

好むものに夢中になれる大切さ

（㈱ビッグエー　遠藤志郎　32歳）

普段生活の中で何故自分だけこんな苦しい目に会うのかという気持ちになるが、誰もが逃げ出したい現実に会うものであることを知った。人生の「先人」たちはそのような日常生活の中で国民文化研究ということを大切にしていることが驚きであった。心身を正常に保つため非常に大切なものであろう。それを好む気持ちに素直に真直ぐに取り組んでいるからこそ大切にできるのだと思う。今私は、森鴎外に夢中である。鴎外の著書を読めば読むほど、彼の女々しい姿が浮かび上がってくる。私はそのような鴎外に近づいていけそうな感じがしている。

先人の生き様を見て感ずるは嗚呼頼りなきわが志かも
好むものに夢中になれる先達の生き様を我が鏡にしたし

片寄っていた自分を身に沁みて感じた

（日本植生㈱　柏木　亨　31歳）

印象深かったことが二点あります。一点目は日本人として、今の生活の礎を築いた日本の歴史上の先人達の思いを知らなかったことに気付かされたこと、二点目は歴史上の事実をありのままに見る目の重要さに気付かされたことです。今まで片寄った偏見で歴史のほんの断片的な理解しかしていない自分を身に沁みて感ずる事ができました。

岸本弘先生に「母」の歌集の話を聞きし後に
電話鳴り耳に当つれば母の声聞こえ思はず微笑みにけり

心の交流が深まった合宿だった

（損害保険料率算出機構　鎹　信弘　56歳）

班付大岡弘さんの助言や中村正和さん（昨年同班）の積極的な意見交換で班内の論議も活発になり、充実し、心の交流が深められた。また講義や体験発表も心に響くものばかりであった。全体感想発表で参加者の本当に感動した思ひを聞けば、またあらためて、本当に良い合宿であったことを実感させられた。

小柳雄平君の発表を聞きて
良き師良き友良き御家族を心より大切に生きる君にあるかな
御家族や師の御言葉を噛みしめて日々を生きますことぞ尊し
君が発表を聞くため仕事の合間縫ひかけつけたりし友もありけり
君ら四人の友の心のつながりの深さ偲ばれ頼もしく思ふ

ありのままの吉田松陰像に驚いた

（國學院大學大学院生　大岡　弘　62歳）

占部賢志先生の吉田松陰に関する御講義には、特に心打たれるものがあった。松陰先生のゆきつ戻りつしながら国体への信を深めてゆかれた御姿の指摘は、新鮮な驚きであった。「つまみ食ひ」的資料の読み方を反省しながら、一歩一歩歴史の実態に推参しなければと思はしめられた。

慰霊祭にて

昇神の時近づきて吹く風に紙垂のなびきぬ手を振る如くに
なつかしき亡き師亡き友お別れのみ手を振らるる心地しにけり

第二十四班―社会人―

充実した合宿

（中島法律事務所　中島繁樹　61歳）

この三泊四日は充実した合宿であったと思ふ。開会式直後の講義も、閉会式直前の講話も配置として問題なしと感じた。

占部賢志兄、ペマ・ギャルポ氏の講義は最高の内容であったと思ふ。このやうな講義を提供できる合宿教室は他にはない。

合宿運営も運営委員のご努力で支障なく遂行された。深く

カメラ・レポート20

最終日の講義として、元県立富山工業高校教諭・岸本弘先生から「学問と友情」と題して本居宣長『うひ山ふみ』の一節を朗読され、『古事記』にこもる日本人の明き直き心を語られ、「心の裡に日本が息づくならば何を恐れることがあらうか」と力強く述べられた。

感謝する。

二十四班の班員は見識のある方々ばかりであり、その話を聞くことが実に楽しかった。このやうな班の班長ならば何度でもやりたいと思ったことであった。

吉田松陰先生

天朝を憂ふこころの正道をにはかに知れりと大人は言ひしも

帰るべき祖国のないくやしさを知る

（㈲清水インターナショナル　清水重雄　74歳）

ペマ・ギャルポ先生のお話がよかったと思います。日本人よ！もっと自信を持って行動せよと云われました。日本人はすばらしい能力、伝統、責任感、家族愛、共同体（家族、会社、住居地域、出身地）などを持っている。日本人はシナと云う国を大国（大きい国土を持った国）と錯覚している。シナ人が侵略しうばい続けている国土が大きいのであって、もともとのシナの国土は現在のわずか37％に過ぎないものであることも強調されました。先生は講義では云われなかったが、シナ人を信用し切っていたため、わずかの国防力しか持たなかったため侵略され、今は帰るべき祖国のないくやしさを秘めておられた。ペマ先生のこのくやしさを私のものとして我が日本の防衛に力をつくして行きたいと思います。一旦緩急の際は74歳の老骨にむち打ち、国防に出向きます。

合宿で若さをもらひ今日からは御国（みくに）の為に身を捨てるとも

国家の弱体化をいかに防ぐか

（㈱はせがわ　代表取締役会長　長谷川裕一　68歳）

八月に入りベトナム、イタリアへの出張、日本ニュービジネス協議会正副会長会等々が続き、参加が危ぶまれましたが、出席でき感謝致しております。いつも御準備下さる方々に心から御礼申し上げます。

今回は同室の方々に大変学ばせて戴きました。特に、法体系は戦後憲法の護持が基本であり左翼思想が軸となっていることを実例の基に学ぶことができ、憲法改正がいかに困難であるかを感じ、国家の弱体化をいかに防ぐか、国文研の働きの強化が急務であると存じました。

若者の尊き国柄に目覚めたる震へる眼差しを頼もしく思ふ

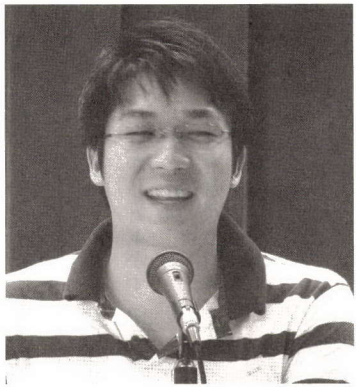
和歌創作ができるようになった

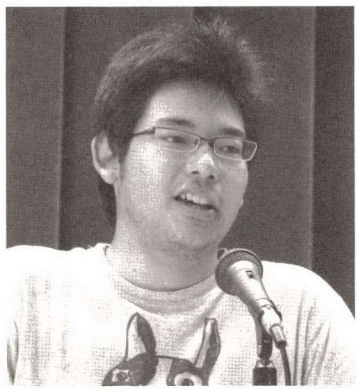
（㈶世界聖典普及協会　石井伸夫　57歳）

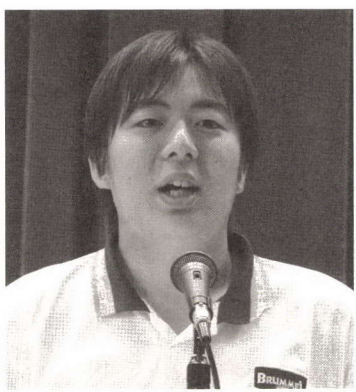
この合宿に参加するきっかけは、和歌創作でしたので、少しでもできるようになったと思いますので、一般生活に戻っても少しずつ一首ずつ創作していきます。

また吉田松陰先生の本はけっこう読んでいましたが、改めて勉強（生涯学習もふくめて）していきます。

占部賢志先生からレッテルを貼らないことを教えてもらいましたので、自分たちで学んでいきます。







全体感想自由発表。合宿の日々を振り返って、「日本をいろいろな観点から捉へることができた」「日本の国の素晴らしさとその日本を守るために戦った人々の思ひにふれることができた」「親しく語れる友を得ることができたことが嬉しい」など、次々と登壇して率直な感想が語られた。

これからやりたいと思っていることは、乃木坂皇居清掃奉仕です。参加者を募集中ですので、九月初めまでにつめていきます。メンバーを拡大してやっていきたいと思います。

大山登山で

帰りぎはバスを待ちをる間中終りを惜しみてアブラ蝉鳴く

班友の話を聞くのが喜びだった

（大森和弘　57歳）

社会人はほぼ同年代の方々の班であり、班別研修で班友のお話を聞くことができたのは、大いに参考となり、喜びでした。二度目の参加にもかかわらず、創作短歌は、昨年と同様に班友に助けられました。感謝です。

講義は長谷川三千子先生の「民主主義と国体」はとても素晴らしかったです。またペマ・ギャルポ先生の「アジアにおける日本の役割」では、アジアの現状、日本とアジアの関わり内容、これから日本がすべきことと分けて明確にお話しいただき、大変、勉強になりました。

全体感想自由発表を聞き、ひとつひとつの講義を思い出させてもらい再確認できました。

来年は友人を誘ってみようと思っています。

感謝をこめて

多刺激と喜び多くありがたし親友（とも）と過ごさんいつの日にかに

本研修に求めるもの

（㈶交通事故総合分析センター　茂田忠良　57歳）

何れの講義も素晴らしく、班別研修も楽しく、私個人としては、正しく本研修に求めていたものそのものであり、本研修を計画実施された国文研の皆様に感謝申し上げます。

本研修が広く若人を日本国民として正しい道にみちびく契機となることを主眼としたものであるとすれば、一般の学生諸君にとっては、かなりハードルの高いものであると思います。もう少し、判り易く、反発を招かないようにする工夫が必要ではないでしょうか。予備知識がないものが理解できる内容、構成に心掛ける必要があるのではないでしょうか。例えば、今林賢郁先生の導入講義は小生にとっては、丁度良いものでしたが、普通の学生にとっては、理解が困難ではないでしょうか。

夏合宿御製御歌をひもとけばそこにいますは国のちちはは

死を超える永遠（とは）の生命（いのち）はあるかはと問へばあるらしやまとの国に

教科書を作っていただきたい

（北陸電力エネルギー科学館　戸田一郎　67歳）

去年の伊勢合宿に続き、私は今回が二度目の参加である。今回も講師の先生方、さらには班員の方々の知識の豊富さに驚くとともに大変勉強になった。

ところで合宿に集まっていた多くの熱心な青年たちもやがて海外に出て活躍する機会は多くなるであろう。自虐的歴史観によって育てられた青年たちの考え方を正し、自国に誇りと自信を持たせることは会にとって重要な任務である。

私しのささやかな経験からいって、中国や韓国の若い世代の日本に対する見方はなかなか厳しいものがある。これら中・韓の青年達に対しては勿論、世界の人々に対しても日本の歴史、とくに明治以降、アジアを中心とした対外政策について日本の青年達は堂々と議論ができるよう、正しい日本歴史を学んで欲しい。そのための教科書を国民文化研究会に作成していただき、毎年の合宿にその教科書を使い、講演を行うことを恒例にされてはいかがであろうか。

また講演の際、講師はパワーポイントを使い、視覚的にも聴衆の理解を助けて頂ければ、貴重な講演がもっと効果的に参加者の心に響くと考えている。

ペマ・ギャルポ先生の講演を聞いて

「美しき日本の国は今いづこ」問はれて悲し外つ国の人に

日本の将来は若い方々に託す他ない

（九州大学　総合理工学研究院　清水昭比古　60歳）

占部賢志先生の講話中「かの吉田松陰にして平安時代の歴史は全く興味が湧かず、六国史も田村将軍以降は面白くなくて、読むのを止めて了った」のくだりが、実に愉快でありま

閉会式。主催者を代表して澤部壽孫副理事長は「皆さんが体験した『心を働かせる』といふことが互いの信頼関係を築き、伝統文化を継承することに深く繋がってゐる。合宿で出合った友と共に勉強して、ここで学んだことを日常の生活の中で生かして行って欲しい」と最後の挨拶を行った。

した。小生の少年時の経験（但し小生は源平の争乱から遡らうとした）と全く同じだったからであります。
日本の将来は若い方々に託す他はありません。合宿で希望を抱き、離れて絶望する、ずっとこれを繰り返してゐます。
点在ではいけません、層にしなくては。
その為には、政治的のアクションが文化的のそれに加へらる可き、と思ひます。

若者の感想発表に接して思ふ
目はかすみ足弱るとも六十路にこそ為すべきことのなど無かるべき

第三十一班―女子社会人―

有意義だった四日間

（九州発言者塾　西川美里　36歳）

今回合宿に初めて参加致しまして、たくさんのご講義・講話・発表を伺い、大変勉強になりました。ご著書を拝読し感銘を受けていた長谷川三千子先生のご講義を聞けたこと、短歌を作り相互批評を行ったこと、慰霊祭に参加したことなどが特に印象深く思い返されます。この感動をうまく言葉にするにはまだ時間がかかりそうです。
お住まいも年齢も様々な方々と接することのできた四日間は大変有意義なものでした。このような場に参加させていただきありがとうございました。
また、合宿最終日に全体感想自由発表を行いました私に、班長の岩越豊雄先生が歌をお詠みくださいました。

勇ふるひ手を挙げ苦手な人前で短歌のよさを述べたる君は
一番の思い出になりました。心より御礼申し上げます。

長谷川三千子先生のご講義を聞きて
書物にてあこがれをりし先生のお声を聞ける今日のうれしさ

日本の事をまだまだ学びたい

（主婦　清水希久子　56歳）

新しい方々との出会いを楽しみに今回も家族で合宿に参加致しました。
諸先生方の御講話を拝聴致しまして、天皇の御心を御製や詔書を通してお偲びすることの大切さ、また先人の書かれたものからその方の御心を知ることの大切さを学び、喜びを深く致しました。日本人でありながら日本の事を知らない私です。まだまだ学びたいと思います。ペマ・ギャルポ先生もおっしゃいました様に、若い方々に日本の事を知って、自分の国に対して誇りと自信を持って頂きたいと思います。
最後になりましたが、心を打ち明けて話せる班友に恵まれ楽しく過ごせました。この合宿の準備をして下さいました方々に心より感謝申し上げます。

七沢のすみわたりたる大空に日の本の旗美しく映ゆ

若者がんばれ

（海外里親会　齊藤仁美　63歳）

初めての合宿、全くの好奇心からの参加でしたが、多くの学生が実に真剣に学ぶ姿を見て驚きに近い喜びでした。日本の将来を担うであろう〝若者がんばれ〟という気持ちでした。又、社会人グループとしては、別れる時はすっかり旧知の仲のように不思議な縁を感じました。

様々な事を学び、これからの私の生活にきっとプラスに反映される事と思いました。

まごころのあふれし友らに囲まれて誇りも新たに合宿終へり
合宿で初めて知りし友なれど共に学びて別れがたきも

自分の心に強い柱を持ちたい

（主婦　廣中幸恵　52歳）

この合宿教室は何年も前から参加したいと願っていました。今回は開催地が厚木と住んでいる所から近く、講師の先生が長谷川三千子先生とペマ・ギャルポ先生だったので、その先生方のお話を直に聞きたいと強い思いで参加しました。

先生方の御講義を聞き、そして一つのテーマを基に班別討論をするのですが、他の人の意見を聞いてそれにどう答えるか、後で「ああ言えばよかった、こう言えばよかった」と後悔することばかりでした。それもまた鍛えられた証拠です。

今林賢郁先生が「一人一人が国を支へる柱とならう」とおっしゃるように、一主婦の自分でも、自分の中に強い柱、批難されてもけなされても折れない太い柱を持とうと決心しました。

また、寶邉矢太郎先生の選んで下さった唱歌の時間は楽しみでした。唱歌には歴史的背景があることを忘れてはならないと感じました。

ペマ・ギャルポ先生のお話を聞きて
み仏の教へ守らむ人々に災ひ与ふ支那憎きかな
七沢の緑輝きわが胸に新たな力湧き上がるなり

日本の未来に大きな希望を抱けた

（日本会議三重　古海玲子　63歳）

念願でありました合宿教室に参加することが出来、心より感謝申し上げます。運営委員の皆様、厳しい暑さの中、大変お世話になりました。ありがたうございます。御講義はすべて感銘を受け貴重な時間となりました。毎朝の国旗掲揚と童謡は素晴らしいものでした。夜に行はれた慰霊祭も印象深いものでした。〝海ゆかば〟を全員で唱和出来たこと、初めての体験でした。

地元三重県に戻りましたら、仲間の多くにこの合宿の内容を伝へ、参加するやうに勧めたいと思ってゐます。又、地元における日本再生の草の根国民運動の中に、和歌創作や輪読

による勉強会を是非取り入れて行きたいと考へてゐます。

学生による全体感想発表を聞き、日本の未来に大きな希望を抱き、国文研の長年の取り組みにあらためて敬意を表したいと思ひます。ありがたうございました。

おそまなびうまずたゆまず道ゆかばたどりつきなむすめろぎのみち

友人との交流を大切にしたい

（神奈川県立秦野曽屋高校教諭　原川猛雄　61歳）

あっといふ間に過ぎた三泊四日でした。三十一班の人達は、問題意識も高く、意欲的に取り組んでをられ、そのパワーにたじたじとさせられました。共に学ばせていただいたことはありがたいことでした。またこのやうな女性方が居られるといふことを心強く感じました。

普段は会へない会員の方々にもご一緒でき、お顔を見たり、お話しを伺へて元気づけられる思ひがしました。

「もののあはれを知る」といふ意味は、人の気持ちがしみじみわかるといふことにもつながると思ひますが、日々の生活において随分と人の気持ちに鈍感だったり、無関心な態度をとってゐたのではないかと、自分のことが省みられます。心を「清明（あか）き」状態に保ち、生き生きとものごとに反応できるやうにしたいと思ひます。

合宿が終った今、これからの一日一日が大切になると思ひます。友との交流を大切にしながら精進していきたいと決意を新たにしてゐます。

岸本弘先輩のご講話を聞きて

先輩は声高らかにつぎつぎと古事記（ふることぶみ）を読みてゆくなり
高らかな調べとともに神々のみ姿浮かび見ゆるが如し

（元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄　65歳）

今回合宿を通じて改めて言葉の教育、分けても古典学習の大切さを痛感した。今、子供達に藤原正彦氏の提唱される「教養立国ニッポン」の基盤づくりの一つの取り組みとして、子供達に古典、分けても「論語」の素読の普及を図ってゐるが、もの学びの宗（むね）として日本の国柄の学びを深めるといふ視点を失ってはならぬと学んだ。

人前苦手といふ班員意見発表に立つ

勇ふるひ手を挙げ苦手な人前で短歌のよさを述べたる君は

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の庭本秀一郎氏（東洋紡績㈱）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の折田豊生氏（熊本市役所）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

九州工業大学　院　一年　鷲頭祥平

大山に登りしをりに
先を行く友らを追ひて行きたくも我が足つかれままならぬなり
幾度(いくたび)も足を止(と)めつつ登る先に我が名を呼びつつ友ら待ちをり

國學院大學　文　四年　坂本匡史

大山登山の際に詠める
人により歩みに違ひは出でたれどそろひて登りし時ぞ嬉しき

國武忠彦先生の御講義をお聴きして
先生の御思ひあふるる御言葉に古人(いにしへびと)の心伝はるゆれうごく人の心をそのままに観ずる心尊かりけり

福岡大学　経　二年　岡松侑希

大山の石段登り下社まで来たりし甲斐あり苦労したれど

熊本大学　工　三年　香川峻輔

膝笑ふ程の石段登り来て深く息吐き心すがしき

福岡大学　経　四年　田中宏輝

大山の大樹の森の大社(おおやしろ)神々しさに奇(く)しき思ひす

第二班

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

古事記の「木花開耶比売」をおまつりする浅間神社ありて
皇孫(すめみま)の美しき后(きさき)鎮まれる御社ここにあるをおどろく
合宿で知りそめし友もいざなひて心合せて皆で詣でつ

成蹊大学　法　四年　亀澤矢汐

大山阿夫利神社下社に就職祈願の燈明のあるをみて一度過ぎさりし後に
何となく気にもかかりて引き返し就職祈願の燈明をともす
祈りても仕方なしとは思ひつつすがりたき念押さへがたしも

桐蔭横浜大学　三年　木阪達彦

ねころびてきみとみそらをみてをれば北斗七星輝きてあり

東京大学　法　三年　大石広行

高校の文化祭でイベントを成功させし友と旅して
久々に友と語りぬ生涯の絆嬉や我ら六人

國學院大學　神道文化　二年　上野竜太朗

大山阿夫利神社で
神社より厚木国原見渡せば遠く来たりとしみじみ思ふ
土産屋で声張り上ぐるおばちゃんの気迫に押されだんご買ひたり

福岡大学　経　四年　岡松和希

大山のあふり神社ゆ見渡せば山も平野も美しきかな

第三班

㈱ハウインターナショナル　桑木康宏

玉の汗かきて登りし大山の阿夫利の宮に友らと参りぬ
きのふ会ひし友らとならびて御社に心を合はせてかしは手を打つ

福岡教育大学　院　二年　平田無為

大山登山

清流より生まれし風は火照りたる頬をふきゆき心地よきかな
先をゆく友らの歩みに合はせむとふるへし足をひたにはこびぬ
大山の御社にのぼりてふりむけば厚木の町は遠くかすみぬ

受付にて

なつかしき友と笑顔を交しつつ今年も合宿に我は来たれり

福岡大学　法　三年　溝部陽平

登山後の友らと浸かる温泉に疲れし体のいやさるるなり

東京大学　法　三年　室園隆大

大山の幾重に続く石段の険しさ越えて登り果てたり
もろともに登り来たりし友どちと語らひ合へば疲れ忘るる

中村学園大学　二年　園田真也

我が友が学びつとむるその姿みれば我が身のかへりみらるる
男坂を下りて
我が友の背中を見れば背かばんのひもののあとには汗のにじみたり
その姿後を追ふ僕は遅れじと刺激を受けて必死に下る

埼玉大学　教養　一年　山中利郎

童謡草木をながめ聴きをれば歌ひし昔の思ほゆるかな
大山の石の足場を一つ一つ積みし人らの労偲ばる

第四班

九州工業大学　情報工　四年　谷口耕平

大山登山の折に

道すがら休める人らに言葉かけ励まし合ひてまた登り行く
「疲れた」と言ひつつも友らは階段を三人ならびて駆け登りゆく

中村学園大学　三年　赤峰大輝

大山登山最後の階段の前で

「かき氷あるよ」としきりに誘ひ来るおばちゃんの声ふりきり登る

西南学院大学　四年　森山正邦

厚木合宿に初めて参加して

日常の喧躁離れ七沢で先人の歌に胸熱くする

福岡大学　経　二年　深見俊樹

いただきにかけ登りきて我が友と町見下ろせば疲れ癒えけり

大阪工業大学　院　二年　川口　亮

大山散策にて

汗流し下社にのぼりてながめたる緑濃き山に疲れも癒えぬ

第五班

ハローワーク福岡中央　古川広治

大山散策

はぢらひを捨てて友らとヤッホーと大声出せば気持ちよきかな

早稲田大学　政経　三年　池上晃平

大山登山の折に

山路ゆき語らひ疲れ訪れし静けさ破り熊蝉が鳴く

学習院大学　法　三年　藤尾允泰

蝉の音や川のせせらぎに包まるる山路をたどる一歩一歩と

國學院大學　文　二年　相澤　守

一刻も早く着かんと大山の険しき道を登るは楽し

日本大学　法　一年　小柳辰介

大山登山の折に

足を止め岩にこし掛け山間ゆかすかに聞こゆ

る蝉の声かな
神奈川私立藤沢翔陵高校　三年　須藤慶一郎

大山下山の折に
山々の木々の緑の美しきけしきを見れば楽しかりけり
福岡大学　経　一年　松井　豊

大山阿夫利神社下社
大山に登り登れば眼下に相模国原広がりて見ゆ

第六班

㈱アルバック　北浜　道

大山登山より戻りて
疲れ果て宿泊棟へと行く道にかなかなの音のやさしく聞こゆ
日本大学　四年　奈良崎大祐

息切らし登り来たれば眼下に厚木の里の広ごりて見ゆ
東京大学　文科二類　二年　豊増隆宏

大山の険しき道を登り切り遥けき眺めに疲れ忘れたり
熊本大学　法　三年　井上慶一

下社にて
息切らし山坂を無心に登り来て友らと共にうつし絵をとる
西南学院大学　三年　平島賢次

友達と語りあひつつ踏み行けば険しき道も楽しかりけり
福岡大学　経　一年　山崎智貴

けいだいに続く階段全力でかけあがりたればさはやかなりけり
ペマ・ギャルポ先生の講義を聞いた後の班別研修

知らざりきウイグル族の住む地にて核実験のあまたありきと
これまでは考へざりしことどもをこの地にて多く聞き知りにけり

第十一班

日本青年協議会　三萩　祥

國武忠彦先生の御講義を拝聴して
活き活きと源氏物語を誦み給ふ師の君の声たのしげにはづむ
懸命に心見つめてその思ひのぶる友らは得難かりけり
東京芸術大学　院　一年　黒柳奈未子

日常のわづらはしさを忘れつつただひたすらに山を登りぬ
福岡大学　商　三年　西村美緒

頑張りて登りし我にご褒美とバニラソフトを買ひ求めたり
土産屋の前にて友とほほばればなほさら味の格別なるかな
筑紫女学園大学　文　三年　井崎恵美

石段の一つ一つを踏みしめつつ登りてつひに辿りつきたり
亜細亜大学　国際関係　二年　三輪夏美

足を止め顔を上ぐれば石段のさらに続きて神社は遠し
福岡大学　商　四年　飯田佳保里

汗だくの顔をふきつつ石段の一つ一つをふみしめ登りぬ
総合学園ヒューマンアカデミー福岡校　一年　森田恵見里

大山散策にて
七沢に初めて会ひし友の顔に汗したたりて慕はしきかな

第十二班

アトラスコプコ㈱　森田暁子

大山登山に行きて
大汗かき足場の悪き山道を登りゆくのは苦し

かりけり

正眼短期大学　二年　田邊さやか

たまに会ふ姪の語るをききながら成長ぶりに我はおどろく

日本歯科大学　歯　四年　小泉喜代子

息きらし険しき道を登りきり宮より見ゆる景色うつくし

九州女子大学　人間科学　四年　小野香美

山道の脇に流るるせせらぎの音聞こえきて涼しき思ひす

大山を息切らしつつ登りゆき見たる社の美しきかな

福岡大学　経　一年　伊藤彩華

友の手を借りつつ登りてやうやくに阿夫利の宮へ我は着きたり

國學院大學　文　二年　椛島明実

無知こそが恥となりしを心にし自ら進み学びてゆきたし

福岡大学　経　一年　渡邊はるか

友の呼ぶ声を励みに御社を目指してさらに登りゆきたり

第十三班

鎌倉の教育を良くする会代表　山内裕子

日の本の古き昔をたづねつつもののあはれに気付く嬉しさ

エアロビクスインストラクター　清水智子

大山阿夫利神社下社に登りし折に思ひがけず鹿と出会ひて

見下ろせば鹿と目があひかはゆさに疲れも忘れ見つめあひけり

福岡教育大学　教　四年　岩見智世

大山阿夫利神社下社に参りしときに実朝が民を思ひて祈られしと同じ社に吾も来りぬ

後輩が学ぶ喜び感じつつ成長しゆくことを祈りぬ

九州女子大学　人間科学　三年　西山志織

もの言はずただひたすらに下りゆく友の姿のふしぎに思ほゆ

山を下りし後に

タンタンと鳴る足音を面白く聞きつつ下りぬと友は語りき

東北大学　法　一年　齋藤瑠奈

息をきらして大山をのぼりし折に

かくまでも登るにけはしき岩の道をつくりし人の苦しさいかに

福岡大学　経　一年　壬生毬絵

頂にやうやく着きて息つけばまはりの人もみな笑みてをり

福岡大学　経　一年　今川聡子

山道を必死の思ひで登りきてそよふく風に汗冷えて涼し

ふと見ればひときは高き木のあるを気づかぬままに上り来しかな

明治学院大学　文　三年　中村友紀

散策と思ひてゐしに山登り息も絶え絶えゴールを目指す

第二十一班

㈱日立製作所　松井哲也

七沢のバス停より合宿地へ向ふ

九年ぶりの合宿なればなかなかに心決まらず悩みてをりしを

先輩より電話を頂きやうやくに行かむとの思ひ定まりしかな

五十年を経にし我が身を改めて見直してみむこの集ひにて

調神社　岸野克巳

ひぐらしの声に御山は包まれて緑濃き道次第に晴れし

風の音の遠いにしへゆまさやかに君民の道定まれるかな

NPO法人教育オンブズマン　日下部晃志

今林賢郁先生の導入講義を拝聴して
数ならぬ身にはあれども我もまた国の柱にならんと思ふ

日本植生㈱　伊集院文隆

大山登山
楽しくも苦しくもあり流るる汗かきつ登りぬ
夏の石段

㈱ビッグ・エー　梶原岳海

石段を走りてのぼる学生に若き日の我の姿を
思ひぬ

㈱ビッグ・エー　山口裕章

大山登山にて
登りきて玉の汗いで手水舎で水をかぶりぬ
童子のごと

㈶中村学園　佐藤啓介

あまりにも祖国の事を知らざりき会ひ得し友
と共に学べば

㈱ハウインターナショナル　祝原正典

どこまでも続く石段に足は疲れされど心は下
社を目指す

SIS㈱　内田厳彦

登り来て阿夫利社ゆ見下せば相模の海の遠霞
み見ゆ
帰り路のバスより見ゆる大山の夕日に映ゆる
峰を仰ぎぬ

第二十二班

亜細亜大学　平槇明人

地球温暖化の影響で昨年より東京で鳴き
始めた熊蝉の聲を聞きて
此の夏により繁く鳴く熊蝉の聲聞くことは悲
しくもあり

出光石油化学㈱　広島秀明

リハビリで療養中の義母を見舞ひに行く
病室のカレンダー見ても今月も退院の文字ど
こにもあらず
リハビリに励みてゐても退院の目途は立たず
に月日過ぎゆく
一日も早くくること祈るのみ退院の文字書き
込める日を

㈱はせがわ　石原　学

御社の側にもみぢの青々と繁る姿を美しと見つ
青々と繁るもみぢ葉秋来れば赤く染まりて人
楽しません
もみぢ葉の秋待つごとく我が妻も我を待たん
と想ひやるかな

㈱ビッグ・エー　浦野洋介

大山を息切らしつつ登り来て下界を見ればこ
こちよきかな

㈱ビッグ・エー　原口京史

石段をはしゃぎて登る学生の若々しさを頼も
しく思ふ

㈱致知出版社　永廣理人

青空と緑の木々と白雲と仰ぎ見るかな幼子の
ごと

第二十三班

損害保険料率算出機構　鎹　信弘

万国忠霊塔の碑のそばに「仰ぎ見る富士
の高嶺の雪よりも清く散りにしますらを
の友」といふ歌碑ありて
南朝の忠臣楠氏の旗印菊水の紋を象りし碑よ
白銀の水に浮かべる金色の菊の花清し菊水の
碑は
特攻の菊水隊と戦ひに散りにし友を偲びし歌か

福岡大学経済学部教授　阿比留正弘

班長がケーブルカーに誘ひしも思ひもよらず
皆登るとふ

㈱はせがわ　田中秀昌

合宿中に誕生日をむかえて
七沢で家族と離れ誕生日さみしき夜に声を聞
きたし

㈱ビッグ・エー　遠藤志郎

妻となる人を得たれば案ずるなと母の墓前に
早く告げたし

日本植生㈱　柏木　亨

仕事で復興にたづさはる災害地を思ひて
大山の豊かな緑眺めつつ崩れしかの地もかく
なれと願ふ

神奈川県立大船高校教諭　中村正和

七沢合宿にわが娘と参加して
大山の神の木立に抱かれてはじめて君と語り
歩みぬ

第二十四班

中島法律事務所　中島繁樹

大山阿夫利神社下社

空近く石段続く大山の森に鎮もり御社のあり

㈲清水インターナショナル　清水重雄

部屋なかに迷ひ込みたるアブラゼミ窓から放
つ数日生きよと

大山に登りて祈る我国の永遠の輝きとその繁
栄を

㈱はせがわ　代表取締役会長　長谷川裕一

今年も合宿に集ひ国柄をしかと心に刻み帰らむ

北陸電力エネルギー科学館　戸田一郎

班別研修にて

国想ふ熱き心を淳々と朋は語れり言葉静かに

産経新聞社　塩塚　保

大山の阿夫利神社のお清め所冷たき水のあり
がたきかな

㈶世界聖典普及協会　石井伸夫

松陰の言葉学びし過ぐる日の合宿の様蘇りけり

大森和弘

講義班別研修

班友が主権の禍をつぎつぎと語るを聞きて我
が無知を愧づ

㈶交通事故総合分析センター　茂田忠良

夏合宿集ふ若人の面見ればのぞみは捨てじ國
の行くへに

第三十一班

元小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄

班員の女らは皆ケーブルで行けども我は山道
登る

汗かきて息もせきつつ急坂の石段ふみしめ頂
き目ざす

急坂の石段最後に登り切り大山寺本堂に着き
たるうれしさ

石段を登り終はればまなかひに阿夫利の宮居
おごそかに立つ

名にし負ふ雨降りの山の木々の緑朱の宮居に
映えてしるけし

日本会議三重　古海玲子

孫たちを見送りてのちかけつける七沢の森の
学び始る

連絡をしたく思へど圏外と表示出たりため息
をつく

それぞれの思ひ抱きて集ひこし同室の友と心
通ひぬ

言の葉のひとつひとつを選びつつ敷島の道皆
と楽しむ

関東の総鎮守なる山の神富士の御山と親子な
るらむ

海外里親会　齊藤仁美

信じがたき暗きニュースに心なえ日本の誇い
まやいづこに

たわわなる木々の緑の山々に心やすらぐわが
祖国なりと

海外で

わけもなく餓えたる国に生まれおちし細き
腕に涙おちきぬ

主婦　清水希久子

大山の独楽の絵かぞへつ参道を友とかたらひ

御社へ向かふ

主婦　廣中幸恵

林泉寺の毘沙門天は凛と立つ謙信公の魂とどめて

九州発言者塾　西川美里

ケーブルカー乗り込みいよいよ動くとき吹き込む風の心地よきかな

散策に景色を見れば作歌を思ひ店先見ればみやげを思ふ

日本美術院研究会員　飯沼春子

師匠との誓ひ果すと決めし時歓喜の焔(ほのほ)わが胸に燃ゆ

国民文化研究会

国民文化研究会理事長　上村和男

大山（阿夫利神社）に登る

石段を登りゆけども御社は遠くにありてなほ登りゆく

若き等も息はづませつ石段を御社めざし登りゆきけり

㈱伊勢利代表取締役　今林賢郁

やうやうに登りきたれば息も切れ流るるごとく汗したたりぬ

憩ひつつ夏の緑に囲まれし阿夫利のみ社しばし眺むる

実朝が雨やめたまへと祈りたる社と聞きぬ阿夫利神社は

元㈱講談社　磯貝保博

いにしへの人もかよひし石段と思ひつつ登る息切らしつつ

信仰の厚き山なり講中の名を刻みたる石柱並ぶ

神まつる雨降りのみ社大山にいだかるるごと鎮もりて建つ

（二回目の作品）

全体感想発表を聞いて

壇上で言葉つまるも合宿で得られたる感激伝はりてこし

がんばれと心の中で幾たびも声のかけたき友あまたあり

元日商岩井㈱　澤部壽孫

大山登山

大山の下社に立てば眼下に相模国原広がり見ゆる

国原に霞立ち込めかなたなる相模の海はけぶりて見えず

油蝉かそけく鳴きてかなかなの声高くして秋立ちにけり

（二回目の作品）

八月十九日、

準備のため前日に七沢に行く、バスを降り山路を歩く

油蝉の声天に満つ真夏日に緑豊かな山路たどれば

山間につくつく法師の声聞え秋立つらしも七沢の里

師の君と厚木の大人の在りし日のみ姿み顔うつつに浮ぶ（小田村寅二郎先生と足立原茂徳市長）

合宿を偲びつつ友逝きてはや十四年の夏めぐり来ぬ（野間口行正兄）

第四十回合宿教室―七沢で四回目―が行はれた直後平成七年八月十八日にご逝去

八月二十日、

今林賢郁兄の合宿導入講義「一人一人が国を支へる柱とならう」を聴きて

若きらの心にとどけとひたむきに友の語れば胸を打たるる

何処にゐて何をなすとも国のこと忘るるなかれと雄叫ぶ友は

國武忠彦先生のご講義「もののあはれを知る」（源氏物語）を聴きて

折々にうなづきたまひ古の文たどります友楽しげに

こまやかにやさしく豊かに飾り無き大和心の
胸に沁み来る
　難波浩さんと会ふ
我が友の助けのありて七沢に合宿なりしを我
れ忘れめや
病ひ未だ癒えざる友の合宿に寄せる期待に応
へざらめや
　八月二十一日
かなかなの合唱の声にぎはしき七沢の空明け
初むるころ
　長谷川三千子先生のご講義を聞く
革命のなかに生れたる「民主主義」にひそむ
まがごと語り給ひぬ
み戦に敗れし日本の国民の進むべき道示し給
ひぬ（昭和天皇のことを）
五箇条の御誓文にて大道を示し給ひし叡智か
しこし
「民主主義は輸入にあらず」と語りましし先
の帝の偲ばれにけり
　ペマ・ギャルポ先生のご講義を聞きて
チベットのことにはふれず日の本の進むべき
道を大人説き給ふ
日の本に生まれ育ちし人よりも情緒あふるる
大人の話は
　八月二十二日、
朝、寶邉矢太郎君が童謡「里の秋」の心
のこもった説明をする
父君の帰りを母と待ちわびし日々よみがへる
友の語れば
「里の秋」合唱へば今亡き父母のみ姿浮び胸
つまり来る
　夜、慰霊祭
師の君の逝きましてはや十年経つ夢の如くに
歳月はすぎ
この十年逝き給ひたる十余人の大人らを友ら
と偲ぶひとときみまつりの斎庭つくりにいそしみし友も今宵
は天降りますらむ
「ますらをのかなしきいのち」と友朗詠ふ声
の消え行く夜のしじまに
我が友の声もさやかに捧げます祭文深く胸に
沁み来る
友の誦すおほみうたはもみしらべも高く斎庭
に響き渡れり
みたまたち喜びますか風そよぎ注連縄の垂手
さゆらぐ見えて
　八月二十三日、全体感想自由発表
若きらの次々に立ち心こもる思ひ語れば涙ぐ
ましも
み国いまくだちゆけども嘆かずに若きら信じ
進み行きなむ
　八月二十四日朝
下関、筑紫、青森の大人たちに合宿無事に終
ると告げむ
友みなの御苦労見事に実りたる合宿なりきと
告げまつりなむ
　上村和男さん、今林賢郁兄と七沢から本
厚木にバスにて向ふ
バス停に百日紅咲きこの冬に逝き給ひたる師
の君偲ばゆ（山田輝彦先生）
拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内健生
　ペマ・ギャルポ先生の御到着を本厚木駅
改札にて待つ
歩みくる人込みの中に先生のお顔を見い出し
思はず手を挙ぐ
右ひだり見まはしますに両の手を高くかかげ
て大きく振りぬ
先生も我に向ひて手を挙げて合図したまふ笑
み浮かべつつ
　㈱寺子屋モデル代表取締役社長　山口秀範
　第四十回合宿（厚木）で小田村寅二郎前
理事長の下、運営委員長を勤めしことを
思ひ出しつつ
合宿の運営の任に與りて努めし彼の日ゆ
十四年

建物も往時さながら師の君の陣取り給ひし部屋もそのままに
報告にその都度伺ひ細々と指示受けしこと今甦へる
窓の外の森深くして夏の陽は強く照れども涼やかに見ゆ
窓の外の緑は彼の日に変はらねど我らの慕ふ師ははやまさず
半世紀を超ゆる集ひの時々に力尽くせし人ら偲ばゆ
受け継ぎて伝へ行かばや縁得て今年も若きら集ひ来たれば

新明電材㈱　飯島隆史

灯をおとし警蹕の声夜の闇におもくしづかに聞こえくるなり

（二回目の作品）

慰霊祭の準備の時

緑葉に白き「ぬで」付け友どちと玉串作る時ぞ楽しき
ひもろぎの深き緑と白き幣この色あひのただに美くし
緑こき榊の秀つ枝に白きぬでしかと結びて友と眺むる

東急建設㈱　奥富修一

自然ふれあいセンターにきて
街中の雑踏過ぎて七沢の宿に来たればひぐらしの鳴く
静かにも山ふところに抱かれて学びの宿にひぐらしは鳴く

大山にて

石段を登りはじめて幾重にも続く坂道息つきかねつ
二千年の歴史を経たる大山の阿夫利の宮の清水冷たき

國學院大學大学院生　大岡　弘

長谷川三千子先生の民主主義と国体に関する御講義をお聴きして

多数派が数の少なき者達を圧殺し尽すその主義恐ろし
古ゆ祖宗の教え承け継ぎて国統べらるる皇御国は

福岡県立太宰府高校教諭　占部賢志

ペマ氏の講義聞きつつ

遠き日の君なつかしく思ひ出づ霧島の里に集ひしかの日の
ただひたにモラル・サポート乞ふのみと語りたまひき若き日の君
今ふたたび日本の使命問ひ迫る言葉は強しかの日のごとく

山口県立熊毛南高校教諭　寶邉矢太郎

導入講義で松吉正資さんの歌を拝してそのみ墓を思ふ

〝うつそみはよしくだくとも〟と墓石にすみあとしるく辞世きざまれり
はらからまたえにしにつながるみともらのねがひ凝りて建つこのいしぶみは
み墓近く岸辺をあらふ瀬戸のはてに沖縄はありそに真向へり
大島のふるさと安下庄に還りますみたまなごめるこのいしぶみは

（二回目の作品）

乙女らのかざらぬことばに久しくも忘れたる心よびさまさるる
ときをりに舟こぎたるもまた負けずとメモとらんとすけなげなるかも
気負はずにおのが体験語りたることば友らの胸にとどきぬ

興銀リース㈱　小柳志乃夫

庭本秀一郎君の短歌導入講義を聴きて

懇切に歌よむすべを説き示す君が言葉は身にしむ如し
作歌体験と人生体験を重ね合はせ説きゆく話聞くにあかなく
親と子の一世の思ひ出となりにけむ歌よみか

はしつなぐ絆は
物のあはれを知るとふ道は生き生きと息づきてあり君の姿に
歌を詠み心通はす日の本の国のまさ道忘れて思へや
（二回目の作品）
小柳雄平の発表を
はしきやしとわが家望みしわが甥のうづまく胸を偲びやるかな
ヤマトタケルのかなしき心に一すぢに連なる甥が言葉うれしも
父母にまた兄・義姉に聞かせまくおもほゆるかも甥が話は
○
よき子供持ちたるといふみ友らの言葉うれしく聞きまつるかも
日章工業㈱　藤新成信
大山の阿夫利の宮に詣づればすずしき風の吹き渡りゆく
見はるかす相模の海はかすみゐて空と陸との境見えずも
（二回目の作品）
童謡の丘にのぼれば七沢の山の緑は美しく見ゆ
昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦
幾重にもそそり立ちたる杉並木阿夫利の山に夕蝉の鳴く
岩の間を縫ふやうにして流れゆく小滝を友とあかずながむる
福岡県立直方高校教諭　小野吉宣
大山神社に参りて
古へのみ祖の信仰偲ばるる剣しき山の社に参れば
大山の境内に立ち広ごれる厚木国原見はるかすなり
ケーブルで急坂下れば風涼しこれぞみ神の恵みなるかな
（二回目の作品）
縁濃き相模のみ山にいだかれて三泊四日をむつみ過ごしぬ
学生が掲揚しゆく日の丸を「君が代」唱ひ仰ぐかしこさ
「里の秋」かなしき歌ぞ母と娘は父の帰りを祈り待ちをり
熊本市役所　折田豊生
あかときの木立をこめて鳴き交すカナカナ蝉の声のかなしさ
打ち揃ひ同じかなしみ共にして経を誦み合ふごとく聞こえ来
この春に逝き給ひたる師の君の偲ばれてならず哀しきその音に
長谷川三千子先生の御講義を拝聴して
世の人が信じてやまぬ民主主義のあやふさつばらに説き給ふなり
ことのははしづかなれども説き給ふことごとなべて力こもれり
五箇条の御誓文こそまつりごとのまことの道と師は説き給ふ
ＮＰＯ法人教育オンブズマン　稲田健二
野外活動
大山の阿夫利の社に湧きいづる霊水もお神酒とともにいただく
「丹沢山塊」の東端にそびゆる大山は相模の国の神と仰がるる
宮前に市場なす店は古ゆ参詣途絶えぬ証なるらむ
（二回目の作品）
宿泊棟にて
合宿の終はりの夜の名残りとて丑三つまでも語りつきせず
品質・環境システム審査員　山本博資
靖國神社参詣（平成二十一年八月十五日）
遺されし文をら読めば国守る眞直ぐなる思ひ我忘れめや
ますらをのまことごころに守られて六十余年を過しきつらむ

合宿教室へ向ふ
バス停で出立つわれをひとりして手を振り見送る孫はたのもし
山本伸治

なつかしき七沢の地に集ひきて偲びまつりぬ亡き大人の御心を

（二回目の作品）

全体感想自由発表を聞きて

しつかりと自分の思ひを語りゆく言の葉強く心に響きぬ

閉会式にて

閉会を宣言する声高らかに会場に響きて合宿終りぬ

元富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘

大山登山

夏草のひまよりひびく山川の瀬音めでつつ坂上りゆく

出会ひしより二日となりし若きらと何くれと語り歩む楽しさ

名にし負ふ男坂をば下らむと落つるごとくに石段（きざはし）を踏む

庭本秀一郎兄の短歌導入講義を聞きて

飾りなく語り給へる言の葉は我らが胸に溶け入るごとく

もののあはれとはかからむものか愛し児をまた奥様を語りゆく君

日揮㈱　江口研治

ツクツクとカナカナカナカナと鳴き競ふ木立の中の夏の昼どき

（二回目の作品）

大山散策。バス誘導の道路脇にて

ひまわりの頭を垂れた首もとで蟻一匹二匹行きつもどりつ

神奈川県立秦野曽屋高校教諭　原川猛雄

今林賢郁先輩のご講義を聞きて

あふれ出づる思ひのたけを語ります先輩（とも）の姿の尊く思ほゆ

地下室で学問のすすめ輪読せし昔なつかしく思ひ出さるる

九州大学　総合理工学研究院　清水昭比古

相模野に元弘の乱れを偲ぶ

鎌倉はいづかたならむ幾里隔つ名越大佛（おさらぎ）如何にして待つ

長谷川三千子女史

國柄を尋ねきはめて説く君の言の葉重しみ姿清し

㈱シアターテレビジョン　大内保治

ひさしぶりにあひにし友はすこやかに我思ふかな友の幸せ

（二回目の作品）

この暑さの中、熱き戦をつづける西村眞悟、東祥三先生に

あつきなかただひたすらに叫びつる日本再生みくにのために

大兄はゆく道なき道をきりひらき日本再生みくにのために

㈶交通事故総合分析センター　小田村初男

をちこちゆ集ひ来たりし若人ら溌剌として頼もしくも覚ゆ

若人は問に答ふる師の君に目を輝かせ聞き入りにけり

日本ユニシス㈱　大町憲朗

長内俊平先生の「文化と文明」を拝読し往時にて

「知解」「体解」「心解」とふ言葉拝しつつ心にひびきくるもののあり

合宿にて何を語らむかと我に問ひ「文化と文明」読みゆく我れはも

若築建設㈱　池松伸典

合宿教室運営本部に故・山根清兄の遺影のかざりてあれば

亡き友の遺影を飾り合宿の営み進むる友のかしこし

なつかしき友の写し絵見つむれば今いますごと思ほゆるかも

暖かき友のまなざしに見守られゆらぐ心も安らぎにけり

（二回目の作品）

閉会式にて

共々に過ごせし友らと「君が代」を歌ふ声音の屋内にこだます

日産自動車㈱　奈良崎修二

大山散策の折、四年前の病気回復の後、妻と訪ねしことを思ひ出す

ケーブルカーの駅指してゆく長き石段妻と歩め り息を切らして

息の切れて歩むもつらき道なれど病のいえて歩むが嬉しき

ＩＭＳグループ本部　最知浩一

昨年の秋から友らといくたびも七沢訪なひ準備すすめ来し

十二年の年月を経て七沢に再び営む夏の合宿全国ゆ七沢に集ふみ友らの顔ながむればうれしかりけり

（二回目の作品）

寶邉矢太郎先生の「里の秋」の唱歌指導の折に

いくさばゆいまだ帰らぬ父上を案ずる母子の姿偲ばゆ

里の秋口ずさみながら吾もまた病に臥せる父を思へり

一日も早く元気にいやされてふるさとの家で語り合ひたし

㈱日本教文社　坂本芳明

大山登山で帰路のみ徒歩で下山せし折にけはしかる岩の階段おそるおそる踏みおりにけり友らと共に

先輩は女坂とぞいはるるも坂のけはしさただごとならず

やうやくに坂をおりきて案内の看板みれば男坂なり

熊本県立熊本高校教諭　久保田真

長谷川三千子先生の御講義を聞きて

語らるる言葉は歌のごとくして聞きもらさじとメモを取りゆく

民主主義一皮むけばおそろしき面のうずまくものと語れり

民主主義をほとんど疑ふこともなく過ごし来たれば講義難し

かかる世に一人思索を重ねられ西欧思想と戦ひませる

日本青年協議会　松岡篤志

血みどろの革命の歴史つみかさね「デモクラシー」なる言葉生まるる

「民主」なる言葉の裏にひそみたるおぞましきまがを師は語ります

五箇条の御誓文かかげ昭和天皇（すめらぎ）は御国の再建導きたまふ

「民主主義は輸入にあらず」と五箇条の明治の帝の大道示さる

アサヒ飲料㈱　澤部和道

をちこちゆ集まり来てはひたすらに指揮班支へます先輩（とも）ありがたし

日本青年協議会　外村聖典

実朝も祈りしと聞く大山の下社に参れば小雨ふりくる

東洋紡績㈱　庭本秀一郎

久保田真先生へ

演壇の前に座りてにこにこと吾が語れるを聴きをられけり

丁寧にと語れる我に時間足りぬポイント絞れとみ教へたまふ

「頑張れよ」と一声かけて微笑みて手を挙げて師は去りてゆかれき

（二回目の作品）

地区懇談会にて合宿の感想を語りし齊藤瑠奈さん

合宿で人間嫌ひが直りしとはにかみていふ君見て嬉し

インターナショナルリスクリミテッド　伊藤俊介

長谷川三千子先生の御講義をお聞きして
空なれど真中におはす天皇を載く歴史ぞ国体
なりと
五箇条の御誓文こそ我が国の政の本と師は
のたまへり

㈱ラック　高橋俊太郎

幾年の間を置いて会ふ友は前と変はらずうれ
しかりけり

（二回目の作品）

三日目の夜班別懇談にて
担当の作業に区切りをつけて飲む麦酒の味は
格別なりき

不二サッシ㈱　高木雅史

清らかな冷たき川の水すくひ頭にかぶりて
清々しきかな

㈱ハウインターナショナル　多賀祐之介

小雨今降り来ると共に蝉声もすずろに涼しく
変はりゆくらむ

㈱東宝スタジオサービス　佐野宜志

つらき大山登山
店先のいろりで焼きし芋団子に甘味噌ダレつ
け友と食みたり
山頂より霞かかりし相模湾を見つつ団子を食
むは楽しき

アルバイト

神奈川県立生田高校一年　江崎真穂

眠らずに聞いて考へまとめてる私もできるや
うになるかな

不二聖女子学院高等学校二年　岸　花帆里

難しき講義に頭悩ませて挽回誓ふ高二の夏よ

合宿地に寄せられた歌

宮崎　小柳左門

合宿の成果を祈る

電話より聞こゆる先輩の声聞けば何かしらね
ど胸あつくなる
暮れゆきて風おだやかに吹く庭に鳴く虫の音
のさやかなるかな
今ころは光源氏の物語語りますらむ声音楽しく
もののあはれ感ずることのたふとさを心をこ
めて語りますらむ
われもまた友らとともに慕はしき先輩の話を
聞きたきものを
合宿に心そそぎてつとめます友らの幸を祈り
まつらむ
こぞことし逝きたまひにし師の君のみたまも
友らをまもりますらむ

青森　長内俊平

合宿教室参加者御一同様へ

神話の伝承豊けき相模の里にして学ぶ友らの
幸をしぞ思ふ
生涯の友を得られて帰らるゝを遠きみちのく
ゆただ祈るなり

東京　小田村四郎

合宿に行かむと思へど老の身の衰へ思ひ諦め
にけり
緑濃き厚木の宿に友どちは集ひ語らひ励みま
すらむ
神代より受け継ぎし道究めむと友ら集ひて学
びますらむ
若き頃幾度か詣でし大山の麓に遊ぶと聞くが
羨しも
日の本の尊き国柄壊たむと企らむともがら世
にはびこりつ
行く先はいかになるかと憂ひては六十年前の
暑き日を思ふ
皇国のゆくすゑ思ひ涙せしかの日は遠く過ぎ
にしものを
一年に一度の集ひ友どちの集ひ幸あれと祈る
のみなり

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過ごしでせうか。厚木市「七沢自然ふれあいセンター」で共に学び、語り合つた「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎました。このたびやうやくこの「感想文集」を皆様のお手許にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもつた文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時でした。

それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

㈠「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

㈡「短歌」について

合宿では二回にわたつて短歌を作りましたが、第一回目のものは班別相互批評をして添削され、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、感想文の執筆の折につくつていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しい生業の中で、御協力いただきました小柳志乃夫、池松伸典、内海勝彦、大日方学、坂本芳明、武田有朋、穴井宏明、高木雅史、濱崎史嘉、高橋佑太、佐野宣志、松井宏太の各氏に心から御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン森谷祐介さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によつて出来上つた「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

読み進むにつれて、「合宿教室」の三泊四日間の様々な感動が鮮明に甦つてくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長、班付の方々、班友に一筆便りを差し上げていただきたく、併せてお願ひ申し上げます。

（北浜　道　記）

〔資料〕
第五十四回〝合宿教室（厚木）〟感想文集
非売品
平成二十一年十二月十五日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集長　北浜道
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇